
サバトの魔術師 #2

フミツキマサヒト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サバトの魔術師 #2

【Nコード】

N0490H

【作者名】

フミツキマサヒト

【あらすじ】

『眠り病』の魔禍^{マギ}から数週間が経った。世間は平穏を取り戻し、司と愛音にも魔女^{サバト}会議による監視が付いたものの一応の安息が訪れていた。だがそんな折り、クラスメイトの水無月が何者かによって拉致される。誘拐犯の首謀者は司が一人であることを要求してきたが、そこで待ち受けていたのは魔女会議たちと同じ『魔女』だった……。

#1↓#2 人物・設定紹介（前書き）

※これはあくまで設定・人物紹介であり、本編ではありません。また、前作のネタバレを含みますので、ご注意ください。

#1↓#2 人物・設定紹介

◆登場人物

・竜胆司 りんどう つかさ

主人公。

虚弱体質で家事が得意なこと以外はごく普通の少年であったが、『眠り病』の魔禍に巻き込まれたことにより、魔女会議サバトとの関係を持つこととなる。

彼自身は魔法的資質を持っていないが、彼の中に内包されているツカサの魂が彼に力を貸すことで、魔法を行使できるらしい。

・三嶋愛音 みしま あいね

司の隣りに住む少女で、幼馴染の関係にある。銀髪に碧の瞳という、異国の外見を持つ。

母が魔女会議サバトに所属していた魔女であり、彼女自身も魔女。かつて幼い頃に司を死に至らしめる事態を招いたことがあり、その贖罪のために彼を救うべく『眠り病』の魔禍の発端を開いてしまう。

魔女会議には母を失った思い出があるため悪印象があり、エイルやシグムドたちには敵意を抱いている。

・エイル・フォースミリア

サバト 魔女会議に所属する魔術師ソーサレスト。金髪淑女の外見。

上層部から『眠り病』の魔禍の調査を命じられ来日、魔禍の最中に司と愛音に出会う。

常に眠たげな様子だが、魔術師としての実力は折り紙つき。従者サーヴァントとしてシグムドを従えている。

・シグムド

エイルの従者。サーヴァント

ミストレス
粗野な顔立ちの青年だが、主人のエイルに対しては兄貴的・父親的關係で接している。

アーティファクト
魔宝具として、グレイプニルを所持している。

・朝槻玲 あさつき れい

司たちが通う学校の保健教諭だが、その正体は魔女。

愛音に協力し、司を助けるため『眠り病』の魔禍を引き起こすが、実際は自らの目的のために二人を利用しようとした狡猾な人物。

本名はイドウン・アークダイルで、エイルとは旧知の仲であったらしい。

・水無月由紀乃 みなづき ゆきの

司と愛音のクラスメイト。

丁寧な物腰の女子で、司に好意をもっているらしい素振りがある。ごく普通の一般人だったが、不幸にも『眠り病』の魔禍の被害に遭ってしまう。

・議長 サバト

魔女会議の最高責任者である議長。

幼女に近い外見であるが、言葉の端々からは老練な性格を窺わせている。

アーティファクト
魔宝具・パンドラの瞳を用いて世界中の魔禍を監視する能力をもっている。

名前は「ミーミル・アッシュ」

・ヴェオフル サーヴァント
議長の従者。

紳士然とした言動が目立つ男性。

・司の父

商社の中間管理職を勤めており、多忙なためなかなか家に帰ってこれない。

親バカを自認している変態であり、色々な意味で息子のことを愛している様子。

・愛音の父

かつて魔女会議の諜報員エージェントを勤めていた経験がある。

愛音の母となる彼の妻も魔女会議の魔術師ソーサレストであったが、彼女が行方不明になってからは生まれ故郷である日本へ愛音を伴って帰国しており、愛音を避けるかのように家にほとんど戻っていない。

◆設定・用語

・魔女

世界の理を魔力で操ることができる力を得た、人でありながら人ならざるものとなった存在。

だが、魔女という存在を『新たな種』とするか、『既存の人間と同一』と見なすかは各々の考えによって異なっている。

・魔女会議サバト

多くの魔女を擁する互助協会。自らの力を危惧する者たちが自然と集まり、現在の形となっている。

主に世の理を故意に捻じ曲げようとする異端者の駆逐や、魔禍マギによって歪められた地区の浄化などの活動をしている。

『世の理と秩序の保全』を主義として掲げているが、それに反発する者たちも多い。

魔女会議に所属する魔女は『魔術師』と呼ばれている。

・魔術師
ソーサレスト
サバト

魔女会議に所属する魔女の呼称。特別普通の魔女と違いがあるわけではない。

当然、魔女会議に属していない魔女は魔術師と呼ばれない。

・従者
サーヴァント

魔女を護り、支える者たち。

例外なく主人である魔女から力を託されているため、ほぼ魔女と比類するほどの能力を有している。

従者となるためには、魔女と専用の術式を用いた契約が必要とされている。

・異端者
グノーシス

世の理を故意に歪める悪しき存在。彼らの駆逐が魔女会議の主な活動のひとつとなっている。

だが異端者の認定は魔女会議の判断で行なわれるため、自分たちはそうだと思っていない者も多々いる。

・魔弾
ガント

魔力を収束した飛翔体。銃弾のようなもので、魔女の基本的な攻撃手段である。

・結魂の法
けつこんのほう

魂を魔力の糸パスで身体と結ぶ魔法。

蘇生魔法としての役割が強く、死した存在を魔法で蘇らせるため魔女会議からの禁忌の魔法とされている。

・還魂の法
かんごんのほう

魂を身体へ還す魔法。

『結魂の法』が糸パスによる結び付けに対して、こちらは完全に身体へ魂を戻し定着させるため、蘇生魔法としてはこちらのほうが実用性が高い。

だがこれも『結魂の法』同様、禁忌の魔法とされている。

・魔道具
アーティファクト

魔力により作られた芸術品。主に戦闘に特化した武具であることが多い。

・悪魔
ルカヴィ

異界に住まう、意志を持った純粋な魔力の塊。
そのままの状態ではいずれ拡散し世界へ溶け込んでしまうため、
司たちの世界に留まるには肉体が必要となる。

・異界

司たちが住む世界とは異なる次元。人間や魔女は存在できず、
純粋な魔力のみである悪魔が巢食っている。

・魔禍
マギ

世の理が歪められ、崩落していく事象。
放置すると世界全体が崩壊する恐れがあり、魔女会議が魔法の濫
獲を危惧している理由のひとつとなっている。

・魔道具
フエティッシュユ

魔法の品。魔道具が一品物であるのに対し、材料や消耗品などが
これに当たる。魔石ジュエルなど。

・造魔
アガシオン

魔女に魔力でもって使役させられている存在。使い魔的とほぼ同

義。

#1↓#2 人物・設定紹介（後書き）

前作との矛盾点などありましたら、メッセージなどにこっそり書いてもらえると思います。

次から、本編が始まります。

プロローグ（前書き）

本編、スタートです。

プロローグ

「――それでは、会議はこれにて終了です」

司会の言葉を皮切りに、魔術師ソーサレストは一斉に席を立った。わらわらと薄暗い会議室から人がまろび出て、最終的に一組の魔術師と従者サーヴァントが残った。

「ふむう……」

魔女会議サバトの議長、ミーミル・アッシュとその従者、ヴェオルフである。

ミーミルは年端もいかない少女の容貌でありながら、醸し出す雰囲気はその外見に似つかわしくないほどの冷静さと老練さを持っている。

それに付き従うヴェオルフは、主人ミストレスの傍らに直立したまま無言を貫いている。端正で美形と呼ぶに相応しい顔立ちをしているが、表情は固く引き締まっている。

そんな議長のミーミルが手にしているのは、今し方まで行なわれていた会議での資料だ。

現在世界中に蔓延している魔禍マギの確認や異端者グノーシスへの対策、その他諸々の事項が漏れなく記載されていた。

その中で、一際突出している情報があった。

「竜胆司りんどうつかさ、か……」

一人の少年の名前を呟いた。

それは日本で数週間前に起きた、『眠り病』と呼称される魔禍に巻き込まれた一般人である。だが、一般人と言うには特殊すぎる事情があった。

「この報告書に記されていることが事実ならば、これほど興味深いことはない。ヴェオルフ、そうは思わぬか？」

「はい、議長」

ヴェオルフは首肯する。その報告書に書かれている事項とは、一

一般人であるはずの彼が魔法を行使したというのだ。

当然の事実だが、魔法を行使できるのは魔女と、彼女たちから力を与えられた従者、そして異界の住人である悪魔^{ルカヴィ}だけだ。そのため、何の変哲もない一般人がその異能を行使できるわけがないのだ。普通ならば。

「しかし、この魔術師の報告は面白い。憑依している別の魂が能力を付与している、じゃと……」

『眠り病』の魔禍を担当した魔術師、エイル・フォースミリアからの報告には、件の人物である竜胆司から興味深い情報が得られたことが記されている。

それによれば、彼にはともに生まれるはずだった双子のきょうだいがいたらしい。だが実際、片割れの双子は生まれず、その存在は一切確認されなかった。彼自身が語るには、片割れの魂は自らの心の中に宿っているかもしれない——と答えている。

「想像するに、その片割れのきょうだいが、魔女としての資質を持つていたというのでしょうか？」

「あくまで可能性としては、だろうがな。事実は分からぬ」

「そうなれば、他の組織へ彼の情報が渡る前に我々が保護するべきではありませんか」

「確かにそうじゃ。だがヴェオルフ……。この魔女会議こそが、もっとも危険な場所かも知れぬということは考えておるか？」

ヴェオルフはそれに無言で応えた。表情はわずかに曇っている。

ミーミルの指摘が凶星だったからだ。

彼女が指摘していること——それは、この魔女会議にスパイが潜り込んでいるかもしれないという可能性であった。

世の理^{ことわり}と秩序の安寧を主義とする魔女会議には、反目するものも多い。魔女が持つ魔法は秩序を歪める悪しきものとされ、それを（完全にではないにせよ）否とされているからだ。

自らの持つ魔力を絶対な力としてそれを誇示するものや、飽くなき魔法への探求から禁忌へ触れるものまで、それこそ多くの思いか

ら魔女会議へ従わない者たちは後を絶たない。

そうした組織に、彼の情報や身柄が渡ることをミーミルは危惧しているのだ。

「だが、だからと言ってあの島国も絶対に安全とは言えぬ。『眠り病』の魔禍が起きたこともある。この問題の処遇は早急に解決せねばならぬな……」

ミーミルは目の前に鎮座している水晶——パンドラの瞳を撫でながら、そう彼女は呟いた。

第1章

「おう、夫婦のご登校だぞ」「仲良いよなーお前ら。結婚しろ」

朝から頭の悪い挨拶をよこされた竜胆司りんどうつかさは、相変わらずのクラスメイトたちに困惑の笑みを浮かべた。

外見は中肉中背で、背丈はやや高く、線はやや細い。そんな形容が似合う少年だ。右手首に巻かれている布製のリストバンドが目立つが、本人はそれを数週間前から大事に身に着けている。

その彼の隣りには、眩しい銀髪と翡翠の瞳を宿したハーフの少女が厳しい目つきで歩いている。彼の幼馴染であり、竜胆家の隣りに住む三嶋愛音みしまあいねは頭の悪い挨拶をよこすクラスメイトたちを視線で射殺するが如く、周りの連中へ睨みをきかせている。

「司、気にしないでいいからね」

「いや……。僕は全然気にしたことなんてない」

溜息をつきつつそう返す。いつも飽きずにあんなことを言うてくるとは、脳味噌が弱いのもかもしれない。それに、ムキになって突つかければ余計からかわれているのは目に見える。無視が安全かつ簡単な対処法である。

「うわっ、汚ねっ!」

そしてそのクラスメイトには、天罰とばかりにカラスの糞が降って来た。

「寄るな糞男! 穢れる!」

「ひでーなテメエ!」

まるで爆弾を落とされたかのように、そのクラスメイトたちの周囲に動揺が広がっていく。司と愛音は罰が当たったのだと言わんばかりに一瞥してやり、そそくさとその場を離れた。

「まったく馬鹿ばっかり。司、さっさと行きましょう」

「ああ」

愛音が駆け出す。司も彼女に続いて歩調を速めた。ほんの数週間

前までなら見られない光景だ。何故なら、司の虚弱體質を配慮して激しい運動は控えていたからだ。

司は幼い頃、愛音を庇ったせいで生死の境を彷徨う事故に遭い、一命を取り留めたものの後遺症で虚弱體質となった。

だが、愛音の後を駆ける司の動きに、鈍さは見られない。まるで後遺症などないかのような、自然な足取りだ。

それにも当然、理由がある。

そもそも彼の虚弱體質というのは、彼が愛音を庇った際に一時死を迎えてしまい、逝く行く魂を不完全な『結魂の法』で繋ぎ止めたことが原因だったのだ。

それを行なったのは、司に助けられたその時の愛音であり、彼女は今は行方知れずの母から魔女としての力とペンダント——魔宝具『カーバンクルの泪』を託されていたのだ。

だが、『結魂の法』は不完全なものだった。そのため司の魂の結合は正しく行なわれず、魂からの情報が身体へ充分に伝達されないことによる弊害が発生した。それが司の虚弱體質の真相である。

しかし今は、『結魂の法』で繋がれた糸^{パス}を外部から魔力で補強する、特殊な術式が身体に刻まれている。それは右手首にあるため、それを隠すのにリストバンドをしていた。

「……何だ？」

二人が学校へ到着し、教室へ来てみるとそこには人だかりができていた。

「何かあったのかしら？」

愛音がその様子を見て首を傾げる。近くにいたクラスメイトは、二人を見つけるとこの人だかりの理由を微笑みながら説明してくれた。

「ああ、水無月さんが退院してきたんだよ」

「えっ？ 本当か！？」

司はすぐさま人だかりの中へ進んだ。人並みを掻き分けると、そこにはクラスメイトと朗らかに談笑している水無月由紀^{みなつき ゆきの}乃の姿があ

った。

「あつ、おはようございます竜胆君」

「おはよう水無月さん……。退院、できたんだな」

「はい。昨日のお昼くらいには病院から出れました。心配をかけてしまったみたいで、すみません」

「いや。水無月さんは謝ることなんてないさ。元々は……」

こちらの都合で巻き込んだことだ——などとは言えない。彼女は自分たちのように特殊な事情を負った人間ではない。先の『眠り病』の原因が自分にあることなど、言うわけにはいかない。

「元々、なんですか？」

「……いや、ごめん。何でもない」

「？　そうですか」

司は心の中で今一度、彼女が無事だったことに安堵した。

一方、愛音は水無月を取り囲む人だかりを遠巻きにしながら、自分の席に腰掛けた。

以前の司による仲介で彼女へのわだかまりはなくなったが、それも完全ではない。『眠り病』の魔禍の引き金を作ってしまった彼女の罪悪感は薄れず、司や水無月へ対する申し訳なさは心中で燻るばかりである。

だがそれを言外にでも悟られてしまつては、却つて彼らの気持ちに負担をかけるのは想像するまでもない。だから、彼らに自分の本音を伝えるわけにはいかないのだ。

「ふう……」

どうしてうまく振舞えないのだろうか、思わず溜息が漏れる。

暗澹たる気持ちへ沈んでいるうちに、ホームルームの時間となった。騒ぎ立っていたクラスメイトたちは瞬く間に着席し、狙ったタイミングで担任の教師が入室してきた。

「えーとですねえ、皆さんにお知らせです。突然ですが、このクラスに転校生が来ることになりました」

おーっ、と沸き立つ教室。担任はそれを諫める。

「それでは、入ってきてください」

ガラッ、と扉の開く音が耳に届く。しかし愛音は机の木目ばかり見ている。いまだ暗澹たる想いに浸かっている彼女にとって、転校生などどうでも良いことだ。

だがこの直後、彼女と司は自分の耳を疑うことになった。

十　十　十　十

「初めまして皆さん。エイル・フォールミリアと言います。……以後、お見知りおきを」

「よおつす。俺、シグムド・フォースミリア。年上そうに見えっけど、お前らとは同じ年だからよろしく」

司は絶句した。彼の見つめる先には、二人の男女の姿がある。

一人は金髪にいくつものヘアピンをつけた少女で、もう一人は茶髪をした長身の青年だ。片方は明らかに10代には見えず、もう片方も醸し出す雰囲気はおおよそ高校生に似つかわしくない。

「あの小さい娘、外国人か？　金髪クレイだな……」

「あの男、ホント高校生か？　ぜってー社会人だろ」

ぼそぼそと雑談が混じるも、大半のクラスメイトたちはそんな二人へ興味が集中している。だが、司が絶句しているのは二人が珍しい出で立ちだったからではない。エイルとシグムドは、司の知る人物であったからだ。

（……なんであの二人がいるんだ？）

思わず小声でそう呟いてしまう。

二人は『眠り病』の魔禍の際に関わりを持った組織・魔女会議ソーサレスト　サーザファントの魔術師と従者なのだ。事情を知っている彼からすれば、二人がこの場にすることは普通考えられないことだったため、思わぬ事態に絶句しているのだ。

そしてそれは愛音も同様だった。だが彼女は、その瞳に敵意と警戒心を宿している。純粹な驚愕のみの司と違い、彼女の態度は二人を危険人物として捉えている様子だ。

(……あとでこっそり、事情を聞こう)

二人がここに来た理由は、当然物見遊山ではないだろう。自分に関わることもかもしれない。司はそう心の中にメモをした。

——だが一時限目が終わると、こっそりというわけにはいかなかった。

「え、えっとお。じゃ、ジャパニーズトーキングオーケー？」

「バカかお前。朝とか授業中だって日本語で喋ってただろ」

「綺麗ねこの金髪。エイルさんもハーフとか何か？」

「このヘアピン可愛いわね。外国産？」

「シグムドってさ、実は20代とか？」

「てっきり体育会系かと思ってたけど、意外に勉強もできるんだな」

「ごくっ、いい体格してるよな……」

転校生としての宿命である、質問攻めに遭っていたのだ。

エイルとシグムドの周囲には人垣が出来、席の離れている司からは既に二人の姿が見えなくなっていた。なので二人がどういう対応をしているのか分からない。

だが周囲の反応は至って普通だ。奇抜なことをやらかさないと心配していたが、それは杞憂であるらしい。

「参ったな……」

これではこっそり話をするなど無理そうだ。放課後ぐらいになって皆の興味が落ち着いた頃に、話をするようにしよう。

「竜胆君は行かないんですか？」

隣席の水無月が話しかけてきた。かく言う本人も、転校生の二人を遠巻きにしている。

「人だかりはちよつとな」

実際は違ふのだが、そう言うておくことにする。実際、数週間前までは少々の人ごみですら息苦しさを感じていたくらいだ。今となつてはそれほど苦痛はないが、それでも人が多い場所というのはとかく苦手だ。

「そういう水無月さんは？」

「あれだけ人が集まってる、近寄りがたいですよー。……興味はあるんですけどね」

「そうだよな、やっぱり」

クラスメイトたちが初めて愛音を見た時の反応を思い出す。彼女も銀髪や碧の瞳が目立つので、当初は休み時間に人が大量に押し寄せてきて大変になっていた記憶がある。

ふと、その人だかりの中に愛音が入っていくのが見えた。何やら厳しい顔つきだ。周囲の人だかりがざわめく。

何をするのかと思いきや、愛音はエイルとシグムドを無理矢理連れ出したのだ。ざわめきは教室中に広がる。

「ど、どうしたんでしょう？」

水無月が戸惑う。だが司もそれに答えられる余裕はない。水無月への返事をせず、慌てて愛音の後を追った。

三人は廊下にいる生徒たちの好奇の視線を完全に無視し、校舎を出て行く。行き着いた先は旧校舎だった。

本来は立ち入り禁止区域になっている場所であるが、以前の魔禍においてこの場に足を踏み入れたことがあったからか、忌避感は大分薄れていた。

「愛音、一体何をしてるんだ？」

「司、着いて来てたの？」

「あんなことをいきなりしたら心配にもなる」

「ごめん。でもどうしてもこいつらに聞きたいことがあったから」

聞きたいことがあったのは司も同じだ。だが、クラスメイトたちの人だから無理矢理引っ張り出してくるとは、大胆すぎるだろう。
「……さて、説明してもらいましょうか？」

愛音は腕を組み、魔女会議の二人へ振り返り睥睨する。対する二人は、能天気なものだった。

「……何を、ですか？」

「さっぱりだな」

「とぼけないで。何でアンタたちが学校（こい）にいるのよ！　ここは魔女も何もない、日常の世界よ！　アンタたち非日常の連中がここにいる理由を教えなさい！」

エイルとシグムドはうんざりした表情を浮かべるも、やがて観念したかのようにシグムドが口を開く。

「……あー、あれだあれ。上層部からの命令でよ、監視役として転入するようになって言われただけだ。そんだけ」

こくり、と眠たげにエイルが従者の言葉に頷く。随分あっさりと言つてのけたが、愛音や司が感じた衝撃は決して軽くない。

「監視つて……、そこまで大層なものなのか!？」

思わず司は声を荒げる。

魔女会議の二人と司・愛音の関係。それは先に起きた魔禍の実行犯としての嫌疑をかけられていることに起因している。

『眠り病』の魔禍の発端は、愛音がイドウン・アークダイルに唆されたことよって行なった、一般人への強制魔力摘出である。その元凶ともいえるイドウンは、魔禍の最中に起きた事故により現世から消失している。そのため、この魔禍の責任者となるべき人間が不在となっている。

消去法でいえば、首謀者であるイドウンがいなければ実行犯である愛音と、その原因を作った司が候補として挙がっている。

だが、彼女はイドウンと共謀していたというより利用されていた立場であり、彼女自身もイドウンによつて被害を負った事実があるため、情状酌量の余地が少なからずある。

それらを鑑み、現在魔女会議では二人の処遇について検討されている最中であるという。

「だから、それまで俺らに現場を押さえとけてことでここにいる

わけだ」

「……まあ、とにかく事情は分かった。魔女会議からの判決が出るまで、この学校にいてることなんだろう？」

「そーいうこと。話が早くて助かるぜ、リンドウ」

いきなり肩を組まれた。これまで普通の友人として接してきたかのような気安さだが、司はそれを跳ね除けることなく享受する。実際のところ、彼は愛音と違いエイルとシグムドに含むところがない。このようなスキンシップも不快を覚えるものでない。

しかし一方で愛音は、いまだ二人を警戒の眼差しで見ている。

「まだ納得できねえってか？」

「……ええ。でもあれこれ言っても仕方ないみたいだし、今のところはもういいわ」

踵を返し、愛音は教室への道に戻っていく。だが一旦立ち止まり、こちらへ振る返ると一言釘を刺してきた。

「でも忘れないことね。私はアンタ達を信用なんかしちゃいけないから」

そう言い残し、愛音は去っていった。そんな彼女の背を見やりながら、シグムドはふうと溜息をつく。

「なかなか頑固な女だな」

「すまない……。でも、彼女も色々と思うところがあるんだ」

「気にしちゃいねえよ。人から恨まれることなんざ、俺たちはしょっちゅうだかな」

シグムドが肩を竦める。その様を見て、司はこの従者と友人になれそうに気がした。

第1章（後書き）

※次回の掲載予定日は6月3日です。

第2章

昼休みを告げるチャイムが校舎中に鳴り響いた。

空腹を覚えた生徒たちはわらわらと教室を這い出て行く。今日も学食や購買は激戦区だな、と思いつつ、司は通学鞆から弁当を取り出す。

魔女会議の二人の姿はない。気がかりではあるが、空腹のほうが先に立ったのでそのまま食事をとることにした。ちなみに愛音は、他の友人たちとともに別所で食事中である。

「あ、あのう、竜胆君……。今、忙しいですか？」

いざ、弁当を口にしようとした瞬間。おどおどとした声が司の耳に届いた。水無月である。

目線だけで彼女を見ると、何やら彼女はそわそわした様子だった。

「今、食事を摂るのに忙しい」

「そ、そうでしたよね。そうですね。すいませんすいません、お邪魔しちゃって」

「別に邪魔じゃないさ。それで、何か用？」

「えーっと……。ですね。その、ですね」

何やら言いづらそうな雰囲気を感じ、司は箸から手を離し、彼女の言葉に耳を傾ける。しばし曖昧に言葉を濁すも、意を決したかのように彼女は言った。

「これっ！ 食べてくださいっ！」

水無月が差し出してきたものは、袋に包まれた菓子だった。

「……くれるのかい？」

「はいっ。あの病院でくれたクッキーのお礼ですっ！」

別にお礼なんていいのに、と司は心中で思ったが、素直に水無月からの好意を受け取ることにした。包みを開け、ひとつ頬張ってみた。

サクッとした触感、固すぎず柔らかすぎず、程よい歯応えだ。

甘さはわずかなもので、味の大半は小麦粉の風味が活かされている。
「おいしいな、これ」

すっと、賞賛の言葉が漏れ出た。それを聞き、水無月は安堵の表情を浮かべる。

「よ、良かったです。竜胆君が作ったのってとってもおいしかったですから、てっきりダメ出しとか来るんじゃないかって、心配してたんですよ」

「文句が出るような出来じゃないさ。充分いけるよ」

二つ目を頬張りつつ司が言う。

「ありがとう、水無月さん」

「い……いえいえいえそんなそんな滅相もないですよホントホント大したことなんてないんですからそんなそんな感謝されることでもないけど少しは嬉しいなって思ってしまった正直な自分が歯痒くも愛しいと感じられる次第ですけどでもでもでも」

突然饒舌になった水無月に、司は戸惑いの目を向ける。他のクラスメイトも同様な視線を向け、いつの間にやら教室に戻ってきていた愛音とエイル、シグムドも水無月の様子に眉をひそめる。

「司、何かあったの？」

「いや……。よく分からない」

司は曖昧な表情のまま、愛音へそう返した。

十　十　十　十

町の中心から離れた倉庫街の一角に、一人の男が佇んでいた。

みすばらしい身なりにぼさぼさの長髪と髭をしており、陰気な雰囲気醸し出している。世間の良識からあぶれた、ならず者である。
「……ああ、ああ。おう。それでいい」

男は携帯電話片手に、誰かと会話をしていた。

「……ホントだつつの。じゃあ、頼んだぜ」

通話を終える。それを見計らったかのように、背後から一人の女性が姿を現した。

整った顔立ちと美貌、そして妖艶さを醸し出しているこの女性は、明らかに日本人の容貌ではなかった。だが、彼女は日本語で男に尋ねる。

「準備はできたみたいですね」

「ああ。言われた通り何人か仲間を誘った。ガキ一人攫って来るな
んぞ、わけねえよ」

下卑た笑みを浮かべつつ男は誇らしげに言う。

「しかしアンタも変な女だぜ。いきなり声かけてきたかと思ったら、
『人攫いをしてくれ』だなんてよ」

「正確には、その人攫いをした少女を使ってある少年を呼ぶことが、
最大の目的ですわ」

「だったら、そのガキをさっさと攫っちまえば済む話じゃねえか」

「いいえ。少女を餌にする必要性があるのです」

「へえ、そうかい。まあ俺らは貰えるもんだだけ貰えりゃ、文句はね
えけどよ」

そう言いながら、男はズボンのポケットを弄った。そこには万札
が無造作に突っ込まれている。しかしそれらは古ぼけた札ではなく、
今し方まで新札だったことが一目で分かった。

「残りの分も、無事目的が果たせたらお渡ししますわ」

女性は手にしているアタッシュケースを地面に置き、開いた。ぎ
っしりと詰め込まれた万札は、男がポケットに突っ込んでいる額
のおよそ数百倍はあるだろう。

「でもよお、なんで俺らを選んだよ？　こういう悪どいことをする
専門職つてのも、日本にゃたくさんあるんだぜ？」

「別に誰でも良かったのですわ。私の要求を聞いて、それを受けて
くる方でしたら」

「へっ。そうかい。……ちっ、ライター切れてやがる。アンタ、火

い持ってねえか？」

口に煙草を咥えたまま男が女性へ問う。彼女は男に歩み寄ると、指先から小さな炎を出してそれをライターの先端に押し付けた。

男は驚きの余り、煙草を取り落とす。女性はそれを宙でキャッチし、男に再び咥えさせた。

「アンタ……。何モンだ」

「魔女ですわ」

何ともなしに、女性——ウル・バルティヴァン——は微笑みながら言った。

十 十 十 十

退屈な授業がチャイムとともに終わった。

生徒たちは教師たちの説教を右から左へ聞き流し、挨拶もそこそこ教室を後にする。

「それでは竜胆君と三嶋さん。また明日ですっ！」

「ああ、また明日」

「うん、また明日」

クラスメイトたちに別れの挨拶を残し、水無月は教室を後にした。昼の一件から、彼女はとても機嫌が良い。周りの友人から心配されるほどの浮かれっぷりなのだが、当の本人には自覚がないらしい。彼女は部活動に所属していない。そのため、授業が終われば学校にいる用がないので、大体彼女はそのまま真っすぐ帰宅することが多い。

時たま友人たちに誘われて遊びに出かけることもあるが、彼女はどちらかという大勢と戯れていることより、少ない人数で穏やかに過ごすことのほうが好きな性格であった。

なのでこの日も、彼女は友人たちからの誘いを丁寧には断り一人で

家路に着いた。

その選択が誤りだったことを、彼女は気づくことがなかった。

水無月が自分の後をつけている人間に気づいたのは、学校を出てから10分後のことであった。

「ど、どうしましょう……」

当惑が脳内を占める。こんな経験などないので、どう対処すれば良いか彼女には分からない。

この場から走り去るか、それとも大声を出すか。だが大袈裟かもしれない、という遠慮がそれらの行動を思いとどまらせる。かろうじて早足になっている程度であった。

背後の気配を振り切るべく、人ごみの多い大通りへ向かおうと歩を進める。だがその矢先に、柄の悪そうな大男がのっそりと現れた。陰気な笑みを浮かべるその大男に嫌悪感を抱いた水無月は、その男を避けるように自然と大通り手前の細い路地へ足を踏み入れた。閑静で薄暗い路地だった。彼女はそこを急いで抜けようと足早になるが、路地の終わりからまたしても大男が姿を現した。

「何なんですか、これ……!」

彼女は焦燥と恐怖がない交ぜになる。偶然にしては出来すぎている。まるで自分を追い詰めるようなタイミングではないか。

背後を振り返ると、自分を追ってきたであろう男の姿が遠くに見えた。だが一人ではなかった。二、三人はいる。

「だ、誰か……」

もはやなりふりなど構っていられない。彼女は助けを求めようと声を上げようとしたが、喉かカラカラになってしまい声を出せない。余計に恐怖心が膨れ上がった。

そうこうしているうちに男たちは、水無月に触れられる距離にまで近づいてきた。そして彼らは、出し抜けに水無月の両手首を拘束してきた。

「えっ……、あっ! 何をす」

そう叫ぶも、急に意識が遠くような気だるさに襲われる。鳩尾の辺りがじんじんと痛い。

恐怖に涙が滲み出るが、それが瞳から零れ落ちる前に、彼女の意識は暗闇へと落ちていった。

「おい、ぶん殴っちまって良かったのかよ」

「ガキを連れて来いってしか言われてねえ。何しようと構わねえだろうが」

水無月を昏倒させた男たちは、路地の出口に停めていたバンに彼女を乱暴に乗せた。

周囲の人は駐車違反の場所に停めてあるバンに迷惑そうな視線を向けるが、水無月の姿は男たちの身体によって巧妙に隠され、見えていない。

バンは乱暴な発進で道路へ出ると、町の中心から離れた倉庫街へと向かった。全く同じ倉庫が立ち並び、そのほとんどが閉ざされている中、一つだけシャッターが開いている倉庫があった。車はその倉庫へと進む。

車は倉庫に到着すると、男は車中に連れ込んでいた水無月を引きずり降ろす。先ほどの鳩尾が効いているのか、大した抵抗もできず為すがままにされるだけである。

「この娘でいいのかよ」

「ええ」

男がウル——先ほど携帯をかけていた男とともにいた外国人の女性——へ確認する。彼女は頷くと、水無月へ近づき、その頬に軽く触れた。水無月は弾かれたかのように身体を一瞬ビクツとさせ、瞳を開いた。

ウルは前置きなしに、彼女へこう訊ねた。

「貴方、竜胆司って男の子知ってるわよね？」

十　十　十

「学校って、おもしれえとこだな！」

「そうかしら」

シグムドの無垢な感想をすっぱりと斬り捨てる愛音の言葉に、司は冷や冷やするものを感じる。今日一日、彼女は彼らに対してこんな感じだ。

「こーいう人で活気付いてるとこって、なんか心が躍るっつうかわクワクするっつうか」

「単純でお気楽なのね」

愛音の魔女会議関係者へ対する嫌悪感は理解している。それをすぐさま矯正しろとは言わない。だが、それでも目の前でいがみ合って（彼女が一方的なだけだが）いられてはこちらの心情は穏やかになれない。

「飯もうめえし、ここの奴らって気のいい奴多いし、楽しいとこだぜ全く」

「そりゃどうも」

事情はともかく、クラスメイトとなったのだ。穏便に、仲良くしたいと思うのが司の気持ちだった。

「……ところでリンドウ。……身体具合は、どうですか？」

「ん。ああ、ずっと調子がいい。エイルさんのお陰だ」

エイルからの問いに、司はリストバントに包まれた左手首を見せながら笑む。愛音に施された『結魂の法』を補強している術式は、彼女から提供されたものである。

本来、彼の立場は非常に微妙なものである。本来は死ぬべき人間だったものが魔法により蘇生させられたことは、世界の理に反することとされている。しかし、だからといってその者の命を奪うことは人道的に躊躇われる。こうした問題は魔女会議においても常に議論されているが、その結論が出たことは今までない。

そんな情勢の中、エイルは先の魔禍が収束した折、現場監督官の権限として司へ不完全な『法』の補強を行なった。確かに彼の蘇生は理に反したものであるが、生きている人間であることに変わりはない。そうした存在が苦しむ様を目の当たりにして、無視できるほど彼女は非人間ではないつもりだった。自身の手で助けられる存在がいて、それが自分の権限で可能かつ規則に反しないものであれば、それを行使用することに躊躇いなどなかった。

「それは……、ありがとうございます」

眠気にまどろむ瞳をしながらも、司からの感謝を受け取る。それを愛音が面白くなさそうに見ているが、彼女は気にしていない様子だ。

「ところでついできてわけじゃないんだが、その……」

司はしばしの逡巡の後、思い切って尋ねる。

「魔女会議では、僕らはどう見られてるんだ？」

エイルの目つきが鋭さを帯びた。シグムドの表情も引き締まり、愛音も彼らの答えを聞くかのように耳を傍立てている。

「……正直、こちらまで情報は伝わってきていません。ケースがケースなだけに、前例もほとんどなかったことですし、どう対処して良いか戸惑っている、……というところでしょう」

「……そうか」

正直、司は落ち着かない気持ちでいた。

自分が目に見えない大きなうねりのようなものに捕らわれている感覚に陥っている。魔法的な力も、今は自分の身体の奥底で眠っているツカサのことも、自分が望んだことでも欲したものでもない。

だが、自分の個人的な事情などを無視して、自分の持っている力というものが目に見えない大きなうねりを動かしていることだけは、はっきりと分かった。

怖いと問われれば、それは確かだ。しかし、今自分に出来ることなど何もない。今はただ、うねりの流れに身を任せることしかないのかもしれない……。

——突如、携帯が鳴り出した。

「!! はい、もしもし」

物思いに耽っていた彼は、慌てたように通話に出る。相手は水無月だった。

『あ、あの竜胆君……』

「どうしたんだ、水無月さん？」

司は疑問を抱いた。彼女の口調が強張っている。何かに怯えているような、気圧されているような感覚を小さな通話口から感じる。果たして、それは正解だった。

『あっ』という声とともに、別の声が耳に届いたのだ。

『貴方が竜胆司ですか？』

「……誰ですか？」

知らない女性の声だ。司はその声の質問には直接答えず、逆に問いたです。

『今質問をしているのは私です。貴方は竜胆司で間違いないですか？』

「ああ、そうだ」

『今から言う場所に一人で来てください。30分後に来なければ、この少女の身の保障はできません』

その声の後ろから、微かだが男の声が聞こえてくる。品のない、下卑た不快な笑みが耳に飛び込んでくる。司は憤怒を覚えた。

「おいアンタ！ 一体何の真似だ!？」

『場所——』

女性は司に怒号にも一切関わらず、一方的に場所を伝えたとそのまま通話を断ち切った。

ツーツー、という空しい電子音が耳を突く。どうするかなどという自問すら、思いつかなかった。あの女の指示に従うしかない。

「司、どうかしたの？」

愛音が心配そうに顔を覗き込んでくるが、それに答える余裕は司にはもうなかった。

「悪い。先に帰る」

彼はそれだけを告げると、すぐさま教室を出た。

第2章（後書き）

平穏な日常生活へ徐々に翳りが……。

次回、バトルシーン有ります。あまり自信はないですがよろしければお付き合ってください。

※次回の更新は6月6日の予定です。

第3章

「随分とお早いご到着だぜ」

司を出迎えたのは、そんな台詞だった。声の主は薄暗い倉庫の中に立っている複数の男である。

「遅刻無欠席が取り得だからな」

司は目を眇める。男たちに囲まれているように、水無月の姿があった。

身体には戒めのように縄で縛られ、口元にはガムテープが貼つてある。気を失っているのかぐったりしているものの、乱暴をされた跡はないようだ。

「……水無月さんを返してもらおうか」

「ああいいぜ。こっちに來な」

男はあっさりそう言った。司は若干拍子抜けしながらも、警戒の面持ちで男たちに歩み寄る。

カツ、カツ、カツ、と倉庫内に司の足音が響く。男たちとの距離があと数歩までと来たその時、司は背後に人の気配を感じた。

「なっ——」

ガツツ、と脳天を鈍器で殴られたかのような痛みが走った。堪らず倒れる。後ろを振り返る間もなかった。男たちのゲラゲラとした下卑た笑い声が聞こえる。

それを皮切りに、男たちが動いた。

無防備な司に殺到し、蹴りや拳の雨を降らせる。彼に抗う術などあるはずもなく、ただただ苦痛に顔を歪めるしかなかった。

「おい、起きな」

リンチに加わっていないリーダー格の男が水無月のガムテープを剥がし、肩を乱暴に揺する。

「うう……」

「見てみな、お前さんのお友達の姿を」

覚醒し切っていないとろんとした目つきの水無月は、男の声に従い顔を上げる。

「り、竜胆君っ!?　なんで、こんな、止めてください!」

彼女は一気に目覚めた。目の前では、自分の友人が一方的な暴力に打ちのめされていたのだ。

「そりゃできねえな。頼まれてっからよ」

「ひどいっ、ひどいですっ」

水無月はぐすぐすと泣き始めた。彼女の泣く声と、司の苦悶、そして男たちの罵声が倉庫内でない交ぜになり、大音響となって空気を振動させている。

「おいおい嬢ちゃん。人様のために泣いてる場合かよ」

「ぐすっ、どういう、意味で」

突如、胸倉が掴まれる。その行動に水無月は泣くことすら止め、目を見開く。

「俺が頼まれたのは、あのガキをボコってからお前にもしてやれってことだ」

「……う、ああ」

止まっていた涙が、再び溢れ出す。今度は自身に迫る恐怖のためである。男は叫んだ。

「お前ら、ガキをこっちに向けろ!」

「うい。オラてめえ、こっち見ろ!」

男たちに蹂躪され抵抗する気力がなくなった司は、そのまま向きを変えられる。

「ガキ、今からこの女を俺のモンにする。お前に見せ付けてやるぜ」
ヒューッ!　と歓喜の声が上がる。司は苦渋に顔を歪めた。身体の節々は苦痛に苦悶を上げており、身じろぎするどころかこうして呼吸をすることすら辛い。

だが動かなければならない。放っておけば水無月に何をされるのか、嫌でも分かる。

(畜生……。動け、動けよ僕の身体……。!)

この無気力感は以前も味わった。数週間前に起きたイドウンとの戦闘の時と同じものだ。

あの時、司はイドウンによって悪魔^{ルカヴィ}に憑依され愛音を死の淵に追い詰めてしまった。だがツカサの力で悪魔からの呪縛を破り、どうにか事態を打破できた。ならば、今回も……！

（頼む、頼むよツカサ……！）

切に、そう願った。

切に、そう祈った。

それが聞き届けられたのだろう。司は身体の奥底から力が湧き出るのを感じた。

脳裏に浮かぶのは、ツカサの存在。これも、あのイドウンとの戦闘の時に感じたものと同じだ。

身体は痛む。だが、それを我慢できる気力は戻っていた。

彼は顔を上げる。ならず者の無骨な指が今にも水無月へ触れそうになり、司の感情が嫌悪で塗りつぶされた。憎悪の炎がちろちろと脳裏を焦がし、彼は激情の命じるがままに魔力を解き放った。

「うおおっ!？」

彼の指と水無月の間を、燃えさかる炎が駆け抜けた。ならず者は驚愕に目を見開き、司を取り押さえる輩もその光景に呆然とする。

司はその隙を逃さず、取り押さえている連中を振り払うと立ち上がった。リーダー格と思しき男が、こちらを怯えた目で見つめてくる。

「な、なんだお前……。ただのガキじゃねえのかよ？」

「そんなことどうでもいいだろっ！ アンタらって奴は、女の子一人攫って縛って脅して、下劣だなっ！」

自分が殴られた痛みより、水無月に恐怖を与えられたことのほうが許せなかった。更なる激情が身体中を駆け巡り、自身を満たす魔力が鼓動する感触を覚える。

司はその暴れ狂う魔力を一気に解き放った。蒼炎が倉庫内を暴れ狂い、例外なくならず者たちを追い立てていく。男たちは恐怖に慄き、ただただ炎から逃れようと滅茶苦茶に走り回る。

ならず者たちに戦意がないのを悟ると、司は水無月を戒めている縄や手錠を外す。彼女は当惑の表情で自分を見ていた。

「あ……っ。えと」

「話をここを出てからだ。早くっ！」

司は水無月の手を強引に引いて出口へ走る。だが、突如入り口から大勢のカラスが津波のようになだれ込んできた。

「なっ!?!」

戸惑う司へ殺到したカラスたちは、次々とぶつかると同時に彼へ体当たりをかます。連続パンチをまともに喰らったかのようなダメージに、彼は咳き込み堪らず膝をつく。

「だ、大丈夫ですか竜胆君!?!」

「へ、平気だ」

体当たりをかましたカラスたちは入り口へ降り立ち、司たちをその鋭い目で睨みつけている。まるでこの入り口から出ることを阻止しているかのようなのである。

「てめえ……。どんな手品を使ったか知らねえが、こりゃマジで生かして帰せねえぜ……」

そして背後からは、先程まで戦意を失くしていたはずのならず者たちがいた。彼らを追い立てていた蒼炎は、司がダメージを受けたことで消失してしまったらしい。男たちの目には、一様に殺意の色が浮かんでいた。

散々味合わされた恐怖が転じたものなだけに、ただならぬものが

ある。彼らは間違いなく、自分たちを殺すだろう。

「くそっ、あいつら……」

司は彼らへと向き直る。もはやお互い傷つかずにこの場を脱出することは無理らしい。司は水無月を背後に庇いながら、威嚇ではなく攻撃のための蒼炎を掌に顕現させる。

それを放つ直前、突如雷鳴が倉庫内を襲った。

「うわあああっ！！！」

男たちの一人が、その雷に焼かれて倒れた。服は焦げ、肌は爛れた。動き出す様子もない。

司は確かめるまでもなく悟った。この男は死んだと。

「な、なんだこれっ」

「やめろっ、来るなあ！」

しかもその雷鳴は止むことなく、男たちへと降り注いでいる。その雷は先ほど自分が放った蒼白い炎とは違い、確実に男たちを焼き焦がしている。今し方まで司を殺意の眼差しで睨み付けていた彼らは、再び恐怖に慄き慌てふためいている。

司はそんな様を、ただ眺めていた。傍らでは水無月が、震える手で彼の服の袖を掴んでいる。

「うひい、があっ」

十何人もいた男たちは瞬く間に倒れ、そして最後の一人も倒れた。倉庫内は屍の山で溢れ、肉が焼ける不快な臭いが立ち込め始める。

「うっ……」

彼はたまらず鼻を押さえた。無理もない。何せ人が焼けている臭いなのだから。

司と水無月が目の前の光景と異臭に戦々恐々としていると、

パチパチパチパチ

場違いの拍手が鳴り響いた。

「お見事です、竜胆司。貴方の能力、見せてもらいましたわ」

倉庫の暗がりから、一人の女性が歩み寄ってきた。司は彼女——ウル・バルティヴァン——の容姿を見て驚愕する。彼女は三角帽子に黒衣という、紛うことなき魔女の格好だったのである。

そして彼が魔女と知って連想されることはひとつ。

「……魔女会議の魔術師か？」

「魔女が全て魔女会議にいらっしゃると思ったら大間違いですわ。そもそも私、あんな組織嫌いですてよ」

「嫌い……？」

「貴女に言っても詮無いことですわ」

司は警戒を強めた。ならず者の襲撃から救ってくれたとはいえ、抵抗する術のない人間を一方的に虐殺したような魔女だ。するに越したことはない。

「目的は何だ？」

「今仰ったとおり、貴方の力を見せて頂いただけですわ」

「本当にそれだけなのか？　だったら何でこんなことまでやる必要がある！？」

司は炭化した死体を指しながら叫ぶ。ウルは面倒くさそうに答えた。

「貴方を極度の緊張状態に陥らせるための仕掛けですわ。恐らく貴方一人だけでは、本気にはなれなかったでしょう？」

「……………アンタ、そんなに僕に興味があるのか？」

「ええ、とても」

妖艶な笑みを浮かべ、魔女はそう言った。

これがもし、不快臭が立ち込め死体が転がる倉庫というシチュエーションでなければ、司の胸はときめいていたかもしれない。

だがこの異常な空間で笑みを浮かべるなど、正気の沙汰とは到底思えない。無論、ときめきなど皆無である。

「さて、いいものを見せて貰いましたし。今日のところは退散いたしましょう」

彼女は自身がもたらした惨禍など目にも入らない様子で、司と水

無月へ背を向ける。

「それでは、またの機会にお会いしましょう。私の名前は、ウル・バルティヴァンですわ。以後、お見知りおきを」

その台詞を皮切りに、彼女の周囲の空間が歪曲し出した。その歪曲空間はウルを飲み込み、瞬く間に戻ってしまった。もう彼女の姿はどこにもない。

後に残ったのは、人肉を焦がした悪臭と、呆然と立ち尽くす司たち二人だけだった。

十　十　十

「ウル、首尾はどうだった？」

惨劇が行なわれた倉庫からいくつか離れている閉鎖された倉庫にて、眦の強いツリ目な魔女——デリング・ザウルトが、空間跳躍して戻って来たウルに尋ねていた。

同じくこの場に居た、三角帽子を目深に被った小柄なもう一人の魔女——フノス・フリスも、無言のままだがウルの答えを聞くため耳を傍立てる。

「ええ、概ね資料通りというところです。さすが魔女会議の資料ですわね」

感嘆とわずかな侮蔑を混ぜ込んだ口調でウルが答える。

彼女が手にしている資料は、本来ならば魔女会議にしか存在しない極秘資料である。しかも、魔女会議にて実際に用いている資料のコピーであり、詳細なデータまでもが添付されている。それが平然と彼女の手にあるのは、魔女会議に入り込んでいる内通者のお陰だ。しかし内通者がいるからとはいえ、こうもむざむざと情報が漏洩されるようでは、魔女会議もふぬけのようだ。

「あの少年に宿っている魂、非常に興味深いものがあります。魔女

会議と事を構える価値は充分と思いますが、お二人はどう思っていますか？」

ウルが笑みを浮かべつつ、他の二人へ意見を求めてくる。

「私はアイツらを殺せるならなんだっていい。人間と誼よしみを組むんざ、虫唾が走る……っ」

デリングは苛立ちを隠さないぶっきらぼうな口調で答え、

「……………ウルさんに、従います」

か細い、だがしっかりとした口調で答えた。

三人の意志を確認し、ウルは決意を固める。

「それでは、彼の確保に入ります。宜しいですね？」

ウルがデリングとフノスへ確認の意を問いかける。デリングとフノスは各々に賛同の意を示した。

第3章（後書き）

戦闘の展開とか描写とか、色々気になるところがあったりします。もし良かったら感想をお願いします。次回は箸休めのな、繋ぎのお話です。

※次回の更新は6月9日の予定です。

第4章

「魔女に襲われたっ!？」

「……本当ですか？」

「ちっ、なんてえこった」

顔中に痣を作った司の話に、三者三様それぞれのリアクションが返ってきた。

倉庫街での出来事から30分後。司はツカサの覚醒が解けて疲労困憊になったままの足取りで、自宅へと戻ってきた。

水無月とは倉庫街で別れた。というより、彼の超人的能力を目の当たりにして恐怖を感じてしまっただろう彼女の方が、逃げるように走り去ってしまったのだが。

その後、先に竜胆家に戻ってきていた愛音による追及を受け、魔女会議の二人も交えて先ほどの出来事を報告している最中だ。

愛音に顔の手当てをされながら、司は話を続ける。

「相手は僕の力を見るためだと言っていた。そして魔女会議を揶揄するようなことも言っていた。……彼女は一体何者なんだ？」

「……私たち魔女会議の理念に同調しない魔女も、事実存在します。彼女らは自俣に己の力を振るい、世界を無意味に歪ませています。」

「……そんな存在を、私たちは『異端者』^{グノーシス}と呼んでいます」

「そいつらはなんで、司を襲ったりしたのよ」

「……リンドウの持っている能力は、私たち魔女の世界でも相当稀有なものです。何らかの手段でその情報を得た彼女らが、それを実際に見極めたかったのでしょうか」

「動物園の珍獣扱いか、僕は」

溜息混じりに司が呟く。軽い冗談のつもりだったのだが、エイルはその言葉を引き取り、話を続ける。

「……珍獣だったらまだ良いのですが」

「ん?」

「最悪の場合、モルモットも有り得ます」

「モル……っ」

「ちょっと、どういうことよ!？」

その言葉に、司は絶句し、愛音は激昂した。彼女の気性の荒さにうんざりしたのか、シグムドは面倒臭そうに言う。

「ミシマ。お前もうちっと落ち着いたほうがいいぜ。うちのお嬢くらいとは言わねえけど」

「余計なお世話よ!」

「……モルモットというのは、そのままの意味ですが」

あくまで淡々と、エイルは言葉を紡ぐ。

「リンドウの能力に興味を抱いた魔女が、貴方自身を確保しようとする可能性は充分に考えられます」

司は身が強張るのを感じた。

「……それを、防ぐことはできないのか?」

司はそう尋ねる。先の一件は、深く彼の中に楔として打ち込まれていた。

自分と行動をともにする人間が、不幸になる。それが分かっているながら何も手を打たないわけにはいかない。今の自分に出来ることをしなければ。司はそう考えていた。

「具体的なことを言うてください。それだけでは、分かりません」

「僕の身柄を、魔女会議の本部に移すとか……って痛っ!」

「司……。アンタ何言ってるの?」

消毒液を多分に吸った脱脂綿に傷が染み、思わず悲鳴を上げてしまう。だがその脱脂綿をピンセットで持っている愛音は呆然自失といった具合で、司へと瞳を向けている。

「ここにいれば、被害が増える可能性がある。エイルさんみたいな魔術師に保護されていた方が、僕自身も周りの人間も安全だろう」

「馬鹿なこと言わないで! こいつらは司の力に興味があるのよ! 奴らの本拠地なんて行ったら、それこそモルモットにされるわ!」
「まさか。……そんなことはないよな?」

エイルとシグムドへ司は視線を巡らす。二人も、それはない、と肯定するかのように頷く。

「信用できるわけっ!？」

「少なくとも、僕は」

「っ……」

愛音は歯を食い縛り、魔女会議の二人を睨みつける。

彼女の魔女会議への怨恨は、司も知るところである。だがその感情ばかりが先走りすぎて、周囲が見えていないのではないか。司はそう危惧している。

「だけどリンドウ。悪いがお前の頼みは聞けそうにねえ」

「どうしてだ？」

「魔女会議の本部も、絶対に安全じゃねえってことだ」
事もなげに、シグムドが言っただけ。

「……先ほど言ったとおり、私たち魔女会議に同調しない、魔女や勢力が存在します。彼女らにとって、私たちの存在は、厄介者でしかありません。そんな相手の、情報はいくらでも欲しいと思うのは、自然な発想だと、思います」

「よーするにだ、スパイがうろついてるってこった。それにそもそも、そういう奴らがいないけりゃ、リンドウの秘密だって知られなかっただろ？」

「確かに……そうだ」

司は納得した。自分のことを知る魔女の存在。それは本来魔女会議に関わった者しか知りえないものだ。

しかしウルは、自分は魔女会議の手者ではないと言った。それはつまり、何者かが流した情報を得たものだろう。

スパイは、確かに存在している。

「結局はアンタらの問題じゃない! アンタら魔女会議が情報をしっかり管理してれば、司のことが知られることもなかったのにっ!」
ここぞとばかりに、愛音は二人に怒号を飛ばす。もっともな意見ではあるが、相手の欠点をあげつらい攻撃するその物言いに、さす

がの司も口を出した。

「愛音。もういいよ、その辺にしてくれ」

「何でよっ!？」

彼女が自分のために義憤してくれているのは、痛いほど分かる。だがこれ以上は司のための糾弾ではなく、自分の憂さを晴らすためにしかならない。だから司は彼女を止めた。

「これ以上は僕のためにならない。頼むから止めてくれ」

「っ……」

再び愛音は齒を噛み締めるも、激昂して椅子から上げかけていた腰を下ろし、着席した。

「……話を纏めると、魔女会議の本拠地も危険な可能性があるってことなのか？」

「そーいうこった」

シグムドが首肯する。

「ここに居続けて周囲の人間に被害を広げると、どっちが被害は少なくて済む？」

「……後者です。仮に魔女会議へ居たがために、リンドウが拉致され、その力を解明されれば、被害は更にひどくなるでしょう」

「……そうか」

司はかすかに頷くのみだった。結局どこに居ようとも、絶対に安全な場所というものは存在しないらしい。

彼は目の見えない大きなうねりが自分を呑み込もうとしているのを、確実に感じていた。

＋＋＋＋

「議長！」

ミーミルの執務室に、普段は見られない慌てたヴェオルフが駆け

込んできた。いつにない彼の取り乱しように、だが彼女は眉ひとつ動かすことなく、訊ねた。

「どうした。何事か」

「我が機関のデータベースにハッキングされた形跡が発見されました！ 紙媒体の資料もいくつか紛失しています！」

一瞬だが、かすかにミーミルの眉が跳ねた。だが従者は気づいた風もなく、ミーミルへと事態の状況を説明する。

「現在は一時的にデータベースの電源を落とし、全てのアクセスを拒否させています。しかしハッキングの犯人はまだ特定できていません。外部からの犯行か、また内部でのスパイの犯行かも判明していません」

「そうか」

ミーミルは鷹揚に頷く。やってくれるものだ――彼女は冷静に思う。

現在の魔女会議の人員は、末端の人間も含めれば千桁の規模にもなる。それだけの人数がいれば、確かにスパイの一人や二人はいるだろう。だがセキュリティを掻い潜り、情報を持っているかとなるとまでは考えていなかった。

自分の浅慮さを呪う。このところの自分はどうかしている。やはり衰えが来ているのだろう。これを使い続けている弊害が……。

「報告ご苦労じゃ。貴殿は引き続き事態の収拾に当たってください」

「了解です。では」

幾分落ち着きを取り戻したヴェオルフは、踵を返し執務室を後にした。一人残されたミーミルは眉間に皺を寄せ、ため息をつく。

「妾も歳なのかのお……」

幼い外見を言う台詞ではないが、彼女の年齢は外見そのままではない。彼女が幼い容姿であるのも、当然ながら理由がある。恐らくは、“パンドラの瞳”を酷使し続けている弊害だろう。

「むう……」

机に鎮座しているデスクトップパソコンが、メール受信を知らせ

た。差出人はエイル・フォースミリアの従者からだった。

開いてみて、またしてもその内容が自分を滅入らせるものであることに愕然とし、舌打ちをした。

「これほどまでに手が早く回るとは……。余裕を持っているわけにはいかぬ」

ミーミルはそう、独りごちた。

＋＋＋

「由紀乃ー、ご飯よー。降りてきなさいー」

水無月は階下から母が呼んで来るのを、布団の中でぼんやりと聞いていた。だが返事をする気力がない。

億劫そうに布団の中で寝返りを打つと、母が部屋にまでやってきた。

「どうしたのよ、由紀乃……。また、具合でも悪いの？」

ちらっと布団の隙間から様子を覗くと、暗がりの中でも分かるほど母の表情は曇っていた。以前の『眠り病』の件もあり、娘の体調に敏感になっているためである。

「……ちよつと食欲ないだけです。そんなに心配いらないます」

「でも……」

「大丈夫ですから」

少しばかり語気を強める。それで渋々ながら、母は部屋を後にする。階段を降りていく音を聞きながら、彼女は心の中で謝罪した。

（すみません、お母さん）

だが、今はとても食欲など出る気分ではないのは本当のことである。

——脳裏をよぎるのは、燃えさかる炎と人肉を焦がす腐臭。

反射的に胃液がこみ上げてくるのを必死に押さえる。不快感が身

体中に纏わりつき、彼女を苛む。

夕刻に遭遇した一件。それは彼女に大きな傷を作ってしまった。

『眠り病』という魔禍に遭遇したとはいえ、普通の世界に生きていた彼女には、男性に暴行をされる機会などなかった。それだけに留まらず、自分に害をなそうとした人間ではあったにしろ、人の死ぬ場面を直視することになってしまった。

そんな彼女の負った精神的ダメージは計り知れない。出来れば、全て忘れてしまいたかった。

だが人間は、良い記憶よりも悪い記憶を留めてしまうという悪癖がある。水無月は自分を苦しめる記憶を追いやろうと足掻くが、どうあっても記憶は消えず、むしろ時間が経つごとにその鮮明さを増しているように感じられる。

それほどまで、彼女にとってあの光景は衝撃だった。

「……竜胆君」

ふいに、その名前を呟いた。

彼は自分を助けてくれた恩人だ。しかし、彼は妙な力を使っていた。

自分を助けてくれたとはいえ、目の前で焼死体とそれを焦がす雷を見て錯乱していた彼女には、彼も恐怖の対象となっていた。

気がつけば、水無月は司から逃げるように倉庫街を後にしていた。悪いことをしたと思っている。

だが、彼への恐怖心は和らがない。素直に礼を言える気持ちにならない。

「……私は、ひどい娘です」

暗闇の部屋の中で、水無月はぼつりと呟いた。

第4章（後書き）

司への干渉は、様々な組織や人へ波紋を広げたようです。果たして、この波紋はどのような波を引き起こすのでしょうか……？

※次回の更新は6月12日の予定です。

第5章

「……今日も来なかったわね」

「ああ」

放課後の教室で、司は暗澹たる溜息をついた。今日も水無月の姿が教室に現れることがなかったのである。

あの倉庫街での一件から、既に数日が経っていた。水無月への連絡は一向に付かず、彼女の様子を知ることができないのが現状だ。司はそれがとても不安だった。あんな凄惨な出来事に遭遇してしまったのだから、平静にはいられないだろう。もしかして大きなトラウマを作ってしまったのかもしれない。そう思うと、身震いする思いだ。

「直接お家にお見舞いでも行ってみる？」

「……そうしたいけど、僕が行くのはまずい気がする」

愛音の提案に司は首を振る。自分が原因であることの後ろめたさのみならず、自分の存在が彼女を脅かすのではないかという危惧もあったからだ。

「……そう」

そんな彼の心中を察してか、愛音はもう何も言ってこなくなった。二人はそのまま無言で身支度を整えて教室を出ようとする、担任の教師が声を掛けて来た。

「ああ竜胆君。今から帰りかね」

「はい。何か用ですか？」

「ここ最近溜まってた配布物を水無月へ持ってってくれんか。ホントは俺が行かにならんのだが、色々仕事があって直接家に行けんのだ」

「……委員長に任せればいいじゃないですか」

「あいつは水無月とは家が正反対だろう。それとも竜胆は行きたくないのか」

「そういうわけ、じゃないですけど……」

そう言い淀んでいると、担任は何を勘違いしたのか、「ああすまん」などと謝り始めた。

「お前には三嶋がいたんだよな。なのに水無月ん家に行けとは俺も無粋なことを言った。これは他の奴に頼……」

「先生。それ以上くだらないこと言ったらひどいですからね」

担任の口上が愛音の視線を受けて止まった。さながら蛙を睨む蛇の如くである。そして愛音は硬直している担任の手から書類を奪い取る。

「それと先生。これは私たちがちゃんと届けますので、ご安心を。では」

担任の脇をすり抜け、愛音は司の手をむんずと掴んですり抜ける。しばし呆然とした司が自失から醒めたのは、校門を出てからだだった。

「な、なあ愛音。そこまで露骨に反応することないじゃないか」

「……そうよね」

そう答えつつも、愛音の表情は固い。相当頭に来ているらしい。

それにしても、自分たちは（色々な意味で）教師側にも有名だったらしい。とはいえ、茶々を入れてくるのは少々大人気ないような気がする。

「あれ。携帯鳴ってる」

誰からだろう、と司が鞆から取り出してみると、液晶には水無月の名前が書かれていた。一瞬、司の動きが止まる。

「どうしたの？」

「水無月さんからの着信だ……」

「……出ないの？」

案じるような目つきで愛音がこちらを見た。司は逡巡する。

正直言えば、彼女と話をしたい。あれから逃げ出すように去ってしまい、その安否さえ分からない。自分が招いてしまったことなだけに、彼女への懺悔の念は深い。

だが、そう思うならば彼女に関わってはいけないとも考えた。既

に自分という存在は災厄を招く危険極まりないものだ。彼女を案じるならば、離れなければならぬだろう。

「……もしもし」

そう思いながらも、司は通話ボタンを押し応答した。結局は、彼女の安否を知りたいという気持ちを上回ったのだ。

『……あ、あの、お久しぶりです』

水無月のか細い声が返ってきた。わずかに声が震えているように聞こえるのは、やはり自分に恐怖心を抱いているからだろう。

しかし、それでも自分へ連絡を寄越してきたということは、何かを伝えたい、または聞きたいということだろう。司はその彼女の意志を嬉しく思った。

『その、直接会ってお話したいので、少しお時間をいただだけませんか？』

消え入りそうな声で言われたその言葉を、司はしっかりと聞いた。

十　十　十　十

夕陽で辺りが茜色に染まる公園に、水無月は一人でいた。

数日続いた鬱は、今朝になって落ち着いてきた。やっとともに頭が働くようになって彼女が真っ先に思いついたことは、司への謝罪だった。

数日前に起きた不可解な出来事。今でも思い出すと恐怖に身が竦むが、それでも司が身を呈して自分を助けてくれたのは事実なのだ。それだというのに、自分は逃げ出してしまっていた。ひどい話である。

だが正直言えば、今もまだ逃げ出したい気持ちでいる。何故なら、水無月は彼にも恐怖を抱いていたからだ。

あの場で繰り広げられていた不可解な事象。それは司の手でも行

なわれていた。彼女が恐怖を抱いてしまうのも無理ない。

「お待たせ、水無月さん」

「あっ……。い、いえ」

司は、彼女が連絡してほどなくやって来た。水無月の姿を認め、彼は相好を崩す。

「具合は……。大丈夫そうだな」

「すみません。心配をおかけしました」

「いや、別にそんなことはない。それより……。僕の方も、変なことに君を巻き込んですまなかった」

深々と頭を下げてきた。水無月は焦る。そんなことをしてもらうために彼を呼んだのではない。

「や、止めてくださいそんなことっ！ 私はただ……」

言いよどむ。やはり迷いはあった。

真実を知る。それは決して良い結果をもたらすことばかりではない。むしろそれを知ってしまうことで、今後彼と今までのように接することができなくなるかもしれない。

だがそれでも、何も知らないままではいたくない。その気持ちは何よりも恐怖心を上回っていた。

「私は、本当のことを聞きたいんです！」

そう告げられた司は、わずかだが顔を背けた。彼女の知りたい事が、彼には触れられたくない心の暗部なのかもしれない。

「……悪いけど、それには答えられない」

そう告げる表情は苦渋に満ちている。だが、口調は明瞭で真摯である。

「あれだけ事態に足を突っ込ませておいて言うのもなんだけど、水無月さんまでこっちの世界に来る必要はないよ。だから、何も聞かないでくれ」

その言葉を聞き、彼女の中の知的探究心は疎んだ。

正直、自分があの状況に説明を求めたのは、ただ単に納得がしたかったこと、そして彼のことを知りたいという利己的な感情による

ものだった。だが、それが浅慮だったことを思い知る。

司の口調から、事態は自分が思っている以上に深刻で危険を孕んでいるものなのだろう。そもそも、平然と人を殺すような人間に出くわすような状況だったのだ。自分が彼の立場であれば、他人を立ち入らせたくないだろう。

「……すみません。我俣を言ってしまった」

「いや、別に水無月さんは悪くない。僕がいるからだ……」

彼はそう言うと、水無月へ背を向けて公園を立ち去ろうとする。

「僕は災いの種らしい。僕に関わるとまた、あんなことが起きると思う。だから、これからは他人のふりをしたほうがいい」

「り、竜胆君。何を言ってるんですか？」

理解できない。いや、正確には理解できる。だがそれを納得することができない。つまり、司は自分とは距離を取れという風に言っているのだ。

「僕は水無月さんが元気そうで安心した。だから、もう関わり合いを持つのは——」

「冗談は止めてください！ そんなこと、できるわけじゃないじゃないですか!？」

自分にとって竜胆司という人物は、その他大勢に分類できるような人間ではない。相手がどう思っているかまでは分からないが、それでも見知らぬ他人になれなど、自分にとってこれ以上の拷問はないであろう。少なくとも、水無月にとってはそうなのだ。

「水無月さん、でも……」

「竜胆君がどう言っても嫌です。私は……」

反射的に大切なことを口走りそうになり、慌てて水無月は口を噤んだ。こんな風に、勢いに任せて言っているいいものではない。だが司は彼なりに何かを感じ取ったのか、改めて彼は水無月へ向き合う。

「ちよつと言いきりすぎだったかもしれない。でも、僕といえればああいうことがまた起きるかもしれないということだけは、忘れないでくれ」

ああいうこと——人肉を焦がす不快臭と雷が脳裏ではじける。だが水無月はかぶりを振り、それらの脳裏から追いやった。

確かに、あんなことを御免だ。だが、もしかたあのような場面に
出くわすことになれば、また司は助けてくれるだろう。水無月には
そんな確信があった。

「分かってます。でもだからって、人を遠ざけるようなことはしない
てください。私たち、友達なんですから」

「……そうだな、すまなかった」

ようやく安堵の笑みを浮かべた司を見て、水無月は胸の中にあた
たかい何を感じた。

＋＋＋＋＋

公園の入り口から二人の会話を立ち聞きしていた愛音は、音も無
くその場を立ち去った。

「……ふん。何よっ」

不平の言葉が漏れ出た。表情も無然としたものとなり、歩調も若
干荒くなる。

先ほど二人の会話を立ち聞きして感じたものは、不快感だった。
もやもやとしたものが胸の中に巣食い、息苦しさを感じてしまう。

「……気持ち悪い」

苛立つが募る。なぜ自分がこんな気分になるのだろう。恐らく理
由は分かっている。

これは、嫉妬だ。

そう気づき、愛音は愕然とする。

「なんで、私がそんなこと……」

自分が水無月に嫉妬しているということは、司とそういうな関係
になりたいという意志の現れ以外に他ならない。そう自分が思っ

いることに、愕然とする。何故なら、自分は未だに司へ後ろめたさを感じていたからだ。

数週間前の『眠り病』の魔禍で犯した罪は、司によって許された。だが彼女自身は、どうしても許せずにした。むしろ司に許されたという事実が、かえって愛音を苦しめている。

良くも悪くも自己犠牲的な愛音の性格が、明らかにマイナスへ傾いた結果起こった感情だ。素直に彼の言葉を聞き入れていれば、余計な葛藤をすることもないのだが、彼女の性格がそれを許さない。

「嫌だな、私。なに考えてるんだろう」

思わず自嘲的な笑みが浮かんでしまう。周囲に人がいなくて良かったな、と冷静な自分が心中で囁く。今自分の顔は、とても気味が悪いに違いない。

「……止めよ、こんなこと考えるの」

どうせ考えても自分の心境は晴れることはないのだ。自分の性格からして有り得ない。軽くかぶりを振り、余計な思索を脳から追い出す。

だがそれでも、鬱屈とした想いだけは晴れずに愛音の中にわだかまり続けた。

第5章（後書き）

次回、また戦闘入りますので興味ある方はお付き合いをお願いします。
……クオリティーの程は保証できる自信はありませんが。

※次回の更新は6月15日の予定です。

第6話

「……んゝつと、これでよし」

ノートパソコンとにらめっこを続けていたシグムドは、伸びをしながら電源を落とした。

今し方まで行なっていた業務報告は終了した。彼は振り返ると、ベッドにてうたた寝としていたエイルへ声をかける。

「お嬢、起きてっか？」

「……おなかがすきました」

「いや、さっき飯喰ったじゃねーか」

「覚えてません」

人間というものは、眠気があると判断や意識が曖昧になってしまうことがよくあるが、レストランのパスタを一通り食い尽くしたというのに忘れているとは、曖昧にも程がある。彼女の胃袋はどうなっているのだろう。魔女といえども、消化器官は普通の人間と変わらないはずだが……。

だが主人に甘い従者は、彼女に飯を食べてないと言われると食べさせてしまいたくなるものなのだ。完全に親バカのそれである。

「んじゃルームサービスでスイーツでも頼むか。お嬢何喰いてえ？」

「キャラメルアイスの5段重ね」

「……りょーかい」

さすがのシグムドもげんなりする注文を言いつけてきた。それでも注文を取るべく彼は受話器に手を伸ばそうとすると、脳裏に微妙な刺激が走るのを感じた。

「……シグムド」

エイルも何かを察したようだ。ホテル周辺に配置していた探知魔法に何かが引っかけたのだ。何かというのは、魔法的要因を孕んだ存在——魔女か悪魔^{ルカヴィ}、はたまた造魔^{アガシオン}だ。

そんなものが探知魔法に引っかかるような状態でうろついている

ということとは、あまり好ましくない。自分たちに用があるのかどうかは分からないが、様子を見に行くべきだろう。

「ちょっくら様子見てくる。お嬢は待ってな」

「私も……行きます」

ぐしぐしと目を手の甲でこすりながらそう申し出るエイルにシグムドは不安を覚えるが、結局は了承した。何だかんだあるも、魔女会議で五指に入る魔術師なのだ。心配は無用だろう。

二人は屋上へと向かった。探知魔法は屋上にひっそりと配置しており、その半径数キロの範囲を探知対象としている。ひとまずは高見から様子を探ろうと思ったのだ。

人目を避けるように屋上へ続く最上階へとたどり着く。辺りは物々しく、薄暗い。

それも当然で、屋上は一般客は立ち入り禁止となっている。だがエイルとシグムドはそんなことに構わず、奥へと進んでいく。ほどなくして、屋上へ出るドアへと辿りついた。

施錠されたドアを目の前にし、シグムドは軽く指先でドアノブを叩いた。ピキン、という軽い音とともに鍵は解除され、二人は何事もなかったかのように屋上へと出た。

今夜は星もなく、空は暗い。光源は遠くに見える、街を彩るネオンライトのみだ。

「随分と近くにいますみてえだな」

脳裏を走る刺激は、徐々に強くなっていた。発信源である探知魔法に近ければ、当然その反応も強くなる。

それはつまり、何者かがこの周辺近くに潜んでいることとなり、自分たちに関わり合いを求めていることになる。ただ単に通りかかっただけならば、こんなに反応が強いはずがないからだ。

「何の用だか」

「ご挨拶にしては、穏やかな感じがしません」

エイルが護衣^{ローブ}を装着しながら、はっきりとした口調で言う。既に彼女の眠気は飛び去り、魔術師としての顔つき（でも目つきは眠そ

う)になっていた。

二人は互いに背を付けながら、周囲を警戒しつつ屋上の開けた場所へと出て行く。辺りに遮蔽物がなければ、対応もしやすい。

ピリピリとした時間が流れる。探知魔法に引っかけた何者かは未だに動かない。いい加減痺れを切らしそうになったシグムドの耳に、カラスの鳴き声が響いた。

「……あんだ？」

「随分な数ですね」

二人の上空を、無数のカラスが舞っていた。余りにも不自然な光景に、しばし二人の思考が止まる。

しかし何羽かのカラスがこちらへ滑空してくるのを見て、二人の思考は現実へと戻された。

「うあっ、こいつら！」

シグムドとエイルは慌ててその場から飛び退る。勢い余ったカラスたちはその場にクチバシから激突し、痙攣を起こし動かなくなる。残っていたカラスは、亡骸となったカラスたちに気を払う様子もなく、再びエイルとシグムド目掛け滑空してくる。

「普通のカラスじゃない……ですね」

「ああっ、こいつら造魔かつ！」

気づいてはいた。そもそも普通のカラスが、いきなり人間に襲い掛かったりするはずがない。

エイルは周囲から襲い掛かるカラスを魔弾で正確に撃ち落とし、シグムドは魔宝具『グレイプニル』をプロペラのように振り回しカラスの突進を弾く。無数のカラスは魔女会議の二人の攻撃に成す術もなく屍と化していく。

「お嬢、こいつらは何がしてえんだ？」

「私も……それに疑問を感じています」

二人の顔に疑問が浮かぶ。いきなりこちらにちょっかいをかけ、

ただ無意味に死んでいくこの造魔たちの意図——いや、これらを差し向けてきた者の意図が読めない。

造魔を撃退する傍ら、二人は思索に耽る。それでも造魔を屠る手は止まらず、無数も居たと思われたカラスたちも、徐々にその数を減らしていた。

だから、反応が遅れたのだろう。突如、エイルの身体が何かによって吹き飛ばされた。

「お嬢っ！？　どこからだ、このっ……！？」

そう言う間に、シグムドも腹部に痛みを感じつつ吹き飛ばされた。魔弾による攻撃である。

魔法防御の効果がある護衣を身に付けていたエイルはどうやら軽症のようだが、普通の私服だったシグムドは苦痛に顔をしかめる。

「ちい……。面倒臭がらずに俺も防護膜貼ってきゃ良かったぜ」

苦痛のせいで動きが鈍ってるのを感じたのか、造魔の標的はシグムド一人へと向かった。

「シグムドっ！」

従者の援護に向かおうとしたエイルに、再び魔弾が浴びせられる。
プロテクション瞬時に障壁で攻撃を弾き、その狙撃手を目で追う。

「ちっ、存外にしぶとい奴だ」

そこにいたのは、眦の強いツリ目な魔女——デリング・ザウルトだった。彼女も黒衣に三角帽子といった護衣の出で立ちで、指先には先ほど放ったと思われる魔弾が浮遊している。

「魔術師、貴様にはここで死んでもらう」

侮蔑と憤怒を孕んだ口調で放たれたその言葉を皮切りに、再び魔弾の驟雨がエイルに殺到する。

「くっ」

エイルは再び障壁を張り、その驟雨を凌ぐ。その横では、シグムドはおぼつかない足取りで造魔と死闘を繰り広げている。

早く従者の危機に駆けつけなければならぬが、デリングの魔弾がそれを許さない。

「何者ですか、貴女はっ!？」

普段ののんびりとした口調と違う、鋭い口調でエイルが詰問する。それに対してデリングは、

「貴様に言う道理はない!　ただここで死んでもらえばいいんだよ!」

言葉は無用とばかりに魔弾の勢いは更に強まった。それに対抗するようにエイルも障壁の強度を上げるが、ずっと魔弾の攻撃に晒されたままでは障壁はもっても、彼女自身が疲弊してしまう。

それは相手にも言えることだから、この場合は先に集中力を切らした方が敗北となる。つまり、この継続している状況を変化させた側の勝利ともなる。

そして、この膠着状態を先に崩したのはエイルの方だった。

「あんまり、……使いたくはなかったのですが」

「何をぶつぶつ言ってる!　独り言とは余裕だ……な、にっ?」

エイルの金髪に付けられていたヘアピンが、突如として意志を持ったかのように動き始めた。魔弾の驟雨を避けるようにいくつかのヘアピンは宙を飛び回り、デリングを包囲するように宙で整列する。するとそのヘアピンは魔力を帯電し始め、先端から魔力をこごめたビームを撃ち出した。

「馬鹿なっ!？」

全く想像のつかなかった攻撃だけに、デリングはまともにヘアピン——魔宝具『トリアイナ』からのビームを受けた。護衣で相当のダメージを抑えているが、それでも無傷というわけにはいかない。攻撃の手はすっかり止んでしまった。

魔宝具『トリアイナ』は、所有者の意志のみでコントロール可能な魔弾射出デバイスである。敵の死角から魔弾を撃ちかけたり、周囲を包囲して敵の行動を制限することも可能だ。普段はヘアピンとして偽装させるため、髪に差し込んである。

ちなみにこのコントロールには魔力による念動が活用されるのだが、複数のデバイスを戦闘と並行して操作するのは、当然ながら非

常に困難なことである。

「戦闘中に攻撃の手を止めるのは、……随分と余裕ですね」

先ほど言われた皮肉のお返しとばかりに、嫌味な言葉とともに魔弾を撃ち返す。トリアイナからのビームも合わせれば、ほぼ周りを囲まれたも当然だ。

「何なんだこれはっ!？」

「貴女に言う道理はありません」

またもや皮肉で返す。完全に状況はエイル側が有利になっていた。デリングは自分が不利なのを悟ると、ほぞを噛みつつその場で跳躍した。

「シグムドっ!」

エイルは彼女を追わず、手負いで造魔と格闘する従者の援護へと向かった。エイルの周囲に浮遊していたトリアイナが一斉にビームを射掛け、エイルも散弾状の魔弾を放つ。

霰のような魔力の奔流がシグムドへ襲い掛かっていた造魔を貫き、蹂躪する。ほどなく疲労困憊のシグムドの姿のみが確認できた。

「シグムド、無事ですっかっ!？」

「あー、なんとかな」

シグムドの顔は笑っているが、口元がひきつっている。腕や顔には造魔から受けた生傷もある。やはり先ほどの魔弾の直撃や傷が堪えているのだろう。

「あー痛え。尋常じゃねえくれえ痛え」

「……安心しました」

痛いと言っているのにエイルがそう呟いたのは、シグムドの口が饒舌だったからだ。彼の身体の頑丈さも知っているし、口がこうも達者なのならば大丈夫なのだろう。

「にしても、解せねえよな……」

「はい。……彼らは、一体何なんでしょうか？」

デリングを撃退した二人は、真っ先に先ほどの疑念を追及した。ただ単に魔女会議が気に入らないから、喧嘩を売ってきたようには

見えない。

魔女会議の組織としての力は、決して小さくはない。安っぽい自尊心で殴りこみをかけ、手痛いしっぺ返しを受けたがるものなどいないだろう。

つまりあの魔女は、明確な意志と目的を持って二人に戦いを挑んできたのだろう。多分に感情的であったにせよ、相手の命を奪うことすら躊躇しないほどに。

ならば、その目的とは――？

「まさか……」

エイルは携帯を手に取り、電話帳からひとつの番号を選択しコールする。だが、

『お掛けになった電話は、電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないため、掛りません。お掛けになった……』

竜胆司への電話は、繋がらなかった。

第6話（後書き）

“ 雑魚の殲滅戦 ” ではない、初の “ 実力者同士の拮抗した戦闘 ” を書いてみました。

まだまだ戦闘（シーンを書いた）経験がないので描写クオリティに一抔の不安を覚えております……。

もし良かったら、感想とか意見下さい。

ちなみに『トリアイナ』は、ギリシア神話の海神ポセイドンが使った三又鉋だそうです（[Wikipedia](#)調べ）

※次回の更新は6月18日の予定です。

第7章

「……んっ？」

かすかな物音を聞き、司はベッドから身体を起こした。

時刻は12時を過ぎたばかり。そろそろ寝ようかと思い、部屋の照明を切ろうとした矢先だった。

「何だ……？」

階下から聞こえてくる。もしかして泥棒だろうか？ 司は自分の想像に身震いする。

閉じまりはした覚えがある。だが、もしかしたらピッキングでもして侵入してきたのかもしれない。彼は足音を忍ばせながら、原因を探るべく階下へ向かう。

「泥棒だったら……、まずは警察か」

ポケットに忍ばせている携帯を握り締め、司は薄暗い一階を見回る。だがキッチンにも、リビングにも、客間や仏壇のある居間にも人影はなかった。

「……気のせいかな」

司は安堵の息をつく。内心及び腰になりながら、見回りをしていた自分が滑稽みたいだ。まあ何事もなかったのだから良かったのだ。

「水でも飲んで寝よ」

キッチンに立ち寄り、冷蔵庫からお冷を注いで一口飲むと、気分が落ちついた。そのまま自室へ戻ろうと階段へ向かうと、

「……っ!？」

いきなり、背後に人の気配を感じた。ありえないことだ。今し方まで自分しかいない場所だったのに、他人の気配がするのだから。

背後を振り返りたいが、怖くてできない。このまま部屋に走って頭から布団に突っ込んで無意識の世界へ行きたいが、そうもいかないだろう。

意を決し、背後を向こうとする。だが身体が動かなかった。

「なっ!?! んで……」

「ちよつと脳からの命令伝達を遮断させて頂いただけですわ」

背後から女性の声が聞こえる。司はその声に、聞き覚えがあった。脳裏に去来するのは、薄暗い倉庫と人肉が焦げる不快臭。

「ウル……バルティヴァン?」

「あら、覚えて頂けていたのですね。恐縮です」

どこか楽しげな声で、ウル・バルティヴァンは言った。

司は彼女に問う。

「こんな夜中に何の用だ?」

「貴方に会いに来た、と言えば喜んで頂けますか?」

「こんな時に冗談は聞きたくない」

「では、冗談ではないとしたら?」

「……どういう意味」

だ、と続けようとした彼の言葉は、そこで途切れた。ウルが司の延髄に魔法ショックを与えたからだ。

ウルは昏倒した司を担ごうとし、彼のポケットからまろび落ちた携帯に目を留めた。

「結構良いものをお使いなのですね。……でも、邪魔ですわ」

彼女は躊躇いなく、司の携帯をキッチンのシンクへ投げ捨てた。水が張ってあった桶へ見事に入った携帯は、精密な電子回路を水に晒され使用不能に陥った。彼の携帯は防水仕様ではなかったのだ。

「さて、デリングが上手く働いているうちに退散いたしましょう」

ウルはそうひとりごとと、空間跳躍の魔方陣ワープを足元に展開した。

彼女の周囲が不自然に歪み、瞬く間に司とウルの姿を飲み込んだ。

キッチンに残ったのはわずかばかりの『歪み』と、動かなくなつた携帯のみだった。

「……何っ？」

竜胆家の隣に住む愛音は、肌が粟立つような感じを覚えた。わずかな違和感が肌を這うような、そんな感覚。かつて眠り病の魔禍で愛音を感じたものと、それはひどく似ていた。

「なんだろう、すごく不安な気持ちに……」

彼女は急かされる様に、司の携帯へ電話をかける。彼の身が心配になったのだ。だが通話口から返ってきたのは、

『お掛けになった電話は、電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないため、掛りません。お掛けになった……』

「……ちよつと、どういうこと？」

愛音の不安は頂点に達した。彼女はすぐさま竜胆家に向かう。三嶋家から竜胆家は歩いて5分もない距離にあるので、瞬く間に彼女は竜胆家の玄関前に着いた。

「嘘よ……。こんなの」

愛音は呻いた。先ほど部屋で感じた不快感。それが竜胆家から強く漂ってきていたのだ。

彼女は確信していた。ここで魔禍が起きたのだと。

「司っ！」

愛音は合鍵で玄関を手早く開けると、足音も荒く竜胆家に入りこんだ。途端、不快感が更に強くなる。彼女は真っ先に司の部屋に向かう。

「司、無事っ!？」

しかし、そこは無人であった。点けっぱなしの蛍光灯が空しく部屋を照らしているだけだ。

「……トイレかしら」

不安を払拭するようにそうひとりごつ。一旦一階へ引き返し、キッチンへの扉が不自然に開いていたのに気づく。

愛音はそこへ足を踏み入れた。わずかに揺らいでいる空間と、水

没して沈黙している司の携帯が目止まった。

「……なにこれ、どういうこと？」

愛音は誰ともいない無人のキッチンでそう呟く。無論それに答え
てくれるものなどいない。

「ちっ、遅かったか」

いきなり、背後からそんな台詞が飛んできた。愛音が振り返ると、
そこには魔女会議の二人がいた。

「遅かったって……なに？ アンタたち何か知ってたの？」

「さっき、魔女の襲撃を受けました。脈絡の無い唐突なものだった
ので、つい最近遭ったリンドウの事件との関連を考えて様子を見に
来て見れば……」

「手遅れだった……つうことだ」

「手遅れって、どういうことよ？」

正直、なんとなく察しはつく。だがそれを認めたくない気持ちだが、
自分で考えることを放棄させていた。

しかしエイルは、そんな彼女へ無慈悲な現実を突きつける。

「恐らく、リンドウは例の魔女に連れ去られてしまったのでしょう。
故意に魔禍を撒き散らす異端者の可能性^{グレンシス}があります」

「……なんで、よ。司が何したってのよ。どうして、司ばかり……」

愛音は溜まらず膝を着き、顔を手で覆う。嗚咽が漏れ出た。

司には悲しい出来事が多すぎる。なぜ彼はこうも不運に見舞われ
なければならぬのだろう。

「……シグムド、リンドウは何処に？」

「さあてな。空間跳躍したのは分かっけどよ、これだけじゃ行き先
なんて掴めねえぜ」

「上手く探知魔法に引つかかればいいですが、……この前のように
破壊されているかもしれません」

「多分そうだろうよ。向こうだった馬鹿じゃねえんだからな」
すすり泣く愛音を尻目に、シグムドとエイルは現状打開について

話し合っている。

(……どこなの、どこにいるの？ 司)

心の中でそう呟く。そんなことで答えが返ってくるはずがないのだが、それでも言わずにはいられなかった。

無意識のうちに、彼女はペンダント――魔宝具『カーバンクルの泪』を握り締めていた。まるで司の温もりを探るかのよう。

ふと、愛音は自分の意識が妙に澄んでいることに気づいた。

傍にいるエイルとシグムドの気配はもとより、竜胆家中の空気の流れ、それよりも広がって路地で瞬く街頭の明るさや闇夜を流離う人々の歩調まで、鋭敏に感じ取れている。

(……なに、この感覚？)

突然の感覚に戸惑う。彼女は気づくことが無かったが、これは『カーバンクルの泪』に刻まれていた術式のひとつである広域走査魔法の発動であった。術者の感覚を極限にまで鋭敏化させ、術者を軸にする探知方法である。

エイルやシグムドが仕掛ける探知魔法は、特定の場所にて設置してそこから探知させるため、その魔法を破壊されれば機能しなくなる欠点があるが、これならば自身を探知源にできるため問題ない。

ただ術者の力量や術式の完成度によって左右されるデメリットもあるのだが、幸いにしてこの『カーバンクルの泪』に刻まれていたものは高精度なものだったらしい。

(これの異常な魔力の流れ……っ！ 司はここ！？)

そして愛音は探し当てた。町の外れにある倉庫街にて、異常な魔力の流れがあることに。

司がいるという確証はないが、今は少しでも小さな可能性に賭けるしかない。彼女は決然と立ち上がる。

「おいミシマ、どったよ」

そんな彼女の様子を訝るシグムドが声を掛けてくるが、愛音はそれに早口で返す。

「司のところに行くのよっ！」

「……リンドウのいる場所が分かったのですか？」

「分からないわ！　でも行ってみるしかないの！」

不審そう（でも眠そうな瞳）に自分を見やるエイルに構わず、愛音は竜胆家を飛び出していった。

第7章（後書き）

司を探し当てたという愛音の能力。

正直、書いた私自身も随分と都合が良すぎたかも……と少々反省気味なのですが、皆さんはどう思ったでしょうか？ 感想、お待ちしてます。

次回、最終決戦です。

※次回の更新は6月21日の予定です。

第8章

「ウル、こいつがお前の言ってたガキなのか？」

深夜の倉庫街のひとつに、エイルとの戦闘から逃れていたデリングの姿があった。彼女は床で倒れ伏せている司を一瞥しながら呟く。その口調には蔑みと不信感が込められている。

「ええ、デリング。ですから丁重に扱ってくださいな」

「フン」

同じく司を拉致して戻ってきたウルも、そこに姿があった。彼女の要望にデリングは鼻を鳴らすことで答えるも、ウルは気を悪くした風もなく、そのままもう一人の仲間であるフノスへ振り返った。

「フノス、あとどのくらいで長距離空間跳躍の魔方陣は完成しますか？」

「……15分」

「分かりました。でも、なるべく急いでください」

フノスは無言で頷く。その足元では、燐光を放ちつつある魔方陣を描かれていた。魔方陣は砕かれた魔石ジュエルが使われており、魔石自身も淡く明滅している。

空間跳躍は、ある程度の距離であれば単独で行使可能であるのだが、一度に大人数かつ長距離を移動するととなると、専用の術式と魔方陣、そして発動までの時間が必要とされる。

フノスはこの三人の中で、長距離空間跳躍専門の役割を担っていた。

「こいつがあの方を真に目覚めさせる”鍵”だといいんだがな」

ふと、デリングがそんなことを呟く。ウルがその彼女の横顔を見ていると、珍しいことに憂いを帯びていた。

「もしアタリなら、どうですか？」

「これほど歓喜に値することはないだろうさっ！ あの方が真に目覚めれば、本当に力を持った私たち魔女がこの淀んでいた世界を正

常にすることができるとだ……！」

「ええ、そうですね」

そう答えるウルの口調は淡々としていた。

かつて魔女の血筋ということで世界から疎まれ、迫害された過去を持つてゐるらしいデリングは人間を憎悪している。その経緯から、彼女は魔女こそが人間より上位の存在であると妄信していた。

だが、ウルにとっては人間など憎悪以前の存在であった。ただ自らの知的好奇心を満たすためのモノでしかなく、別段感情を抱くものでもなかった。ただ、彼女たちと同じ組織に入れば好都合で、魔女会議では不都合だった。彼女が魔女会議を嫌っているのは、そうした理由であることに他ならない。

フノスに関してはよく分からないが、ウルは全く気にしなかった。単に任務遂行上のパートナーとしか思っていないし、向こうもそれで構わない素振りだ。

何を興奮しているのだか——と、ウルは冷めた気持ちでデリングを見やる。勿論口には出さない。無駄ないざごさは起こしても益がない。

「……んっ」

ふと、倉庫の入り口に複数の人影があった。月明かりを背にしたその姿は、護衣を身に纏った二人の魔女と一人の従者だ。

「ちっ、もう見つかったってのか」

「あらあら」

デリングは舌打ちし、ウルは苦笑しつつも楽しげな表情を作る。

ふと、デリングは気づく。

「あっ？ 一人増えてるな、仲間か？」

「仲間じゃないわ！ 私は魔女会議じゃないもの！ ただ司を返してほしただけよ！」

デリングが知らない一人の魔女が叫ぶ。それを聞き、デリングは間の抜けた表情になった。

「魔女会議じゃないだと……。だったら何故、私たちに敵対する？」

「司を返してほしだけよ！ それ以上のことなんて望んでいないわ！」

「貴様……。ただそれだけの理由で、同胞の私たちと敵対するとい
うのか？」

「文句あるっていうの！？」

「……全く。貴様といい、魔女会議の連中といい、何故こうも愚かな奴ばかりなんだ！」

デリングが激昂する。それに呼応するように、彼女の手の内で魔弾が練られ、収束していく。

「ならば消えろ！ 人間の肩を担ぐなら全て敵だ！」

その言葉を皮切りに魔弾が解き放たれる。それを受け止めたのはデリングが先ほど交戦した魔術師——エイルだった。

「また貴様か……。さっきは不覚を取ったが、今度こそ仕留めてやる」

「そうですか。ならば頑張ってみてください」

エイルの淡々とした返しに苛立ったのか、デリングは更に激昂する。

「飄々としやがって！ 今に貴様から苦痛の叫びを上げさせてやる！」

魔弾の驟雨が激しさを増した。エイルはそれをいなしつつ、従者ともう一人の魔女——シグムドと愛音へ指示を飛ばす。

「シグムドはあのリーダー格の魔女を押さえてください！ その間にミシマはリンドウを！」

「合点承知の助！」

「言われなくたって！」

二人は各々で応えを返し、それぞれの相手に向かった。

十 十 十 十

愛音は司が倒れている魔法陣へ駆けつけた。他の魔女は魔女会議の二人が抑えている。ならば背後を気にする必要はない。自分は司を取り戻すことだけに専念すればいいのだ。

憎んでいるはずの二人に背を預けることは不本意なはずなのに、何故なこの時の愛音は——ほんのわずかであるが——感謝の意を抱かずにはいられなかった。

（気に喰わない。……けど今はそんなことに拘ってる場合じゃないわ！）

魔法陣を維持している魔女——フノスは目の前だ。彼女は一心に魔法陣を維持しているためか、愛音が近くに来て動揺している様子はない。

「随分と余裕みたいね……。でも司は返してもらおうわ！」

愛音はフノスの正面に立ち、『カーバンクルの泪』を掲げた。ペンドラント状の魔宝具に魔力が収束し、魔弾を形成していく。

「司を攫おうって奴には容赦はしないわよ。火傷くらいで済むといいわね！」

相手を倒すことも辞さない気迫で、愛音は魔弾を放とうとする。だがその刹那、彼女の頭上から漆黒の影が飛来してきた。

「痛っ！ な、何……カラス！？」

頭上を見上げ、彼女は驚愕する。倉庫の天井一面に、黒い影が蠢いていた。カラスだった。

彼女の動揺を突くかのように、カラスの造魔は一斉に愛音へ襲い掛かった。彼女は慌てて障壁を張り突進を防ぐが、何匹かは間に合わずに彼女の肩や腹部をクチバシで掠める。

「ああっ！ うう、痛い！」

苦痛に顔が歪む。掠り具合が悪かったのか、傷口を押さえた手には血がついていた。

だが造魔はそんなことに斟酌するはずもない。障壁をこじ開けようとするかの如く、津波のように障壁へぶつかってくる。

「くっ。たかが造魔なんか……」

強がるものの、その顔には苦痛が漂っていた。目の前では、着々と魔法陣を構築しているフノスの姿がある。この倉庫内に満ちている不穏な魔力の動きが、あと間もなくに魔法陣が完成することを感じさせる

そうなれば、あの魔女たちとともに司は何処と知れぬ異邦の地へ連れ去られる。彼との別れだ。

「そんなの……嫌よ」

絶望が胸にこみ上げてくる。それは自分が望まぬ未来であり、自分が動かなければ変えることができないものだ。しかし、身体が既に疎んで動ける状態でない。歯痒くてならない。

「くっ、動いてよ私の身体……！」

愛音は苦痛に身を振じらせつつ、歯を食い縛っていた。

十 十 十 十

『司、起きて』

暗闇に漂っていた司の意識は、その言葉によって覚醒した。

『……ツカサか？』

辺りは果てしなく続く暗闇。上下左右奥行きの感覚すらない、虚無。だがその空間の一点に、暖かな光が漂っていた。

『司、寝ている場合じゃないよ』

明瞭な言葉だった。あの魔禍以来、彼女の声を聞くことはできなかったが、片言しか話せなかったあの時と比べると随分と人間らしくなっていた。

『僕はどうしてたんだ？ ……たしか、ウルって魔女に連れて行かれて』

『愛音ちゃんが、また大変なの』

『愛音が？ また……またなのか！？』

司は苦悶する。愛音には苦しい出来事が多すぎる。なぜ彼女はこ
うも苦痛を味わなければならぬのだろう。奇しくも、愛音と同じ
ようなことを彼も思う。

『司を助けようとして、あの魔女たちと戦ってる。でも、もう無理
みたい。早く司が助けてあげないと殺されちゃう』

『……ツカサ、また力を貸してくれるか？』

『私はどんなことがあっても、司を護るって言った』

司の四肢に力がみなぎり、暖かな感覚が心を満たしていく。ツカ
サの力が、司に流れ込んでいた。

『だから司を護って、司の護りたいものも護る。心配しないで、司
は存分に戦って』

『分かった。ありがとう、ツカサ』

ツカサはくすつとわずかに笑うと、その気配を徐々に消していく。
同時に虚無が光に浸食され、意識が現実へと戻っていく。

十 十 十 十

瞼をそうっと開けると、燐光が司を取り巻いていた。

自分が頬をつけている床に描かれている魔法陣から現れているも
のらしい。彼はその魔法陣を無意識に探知し、それが遠距離空間跳
躍のものであると知ると、戦慄する。

どうやら術者は、気を失っていた自分をそのまま異邦の地へと連
れ去ろうとしていたらしい。

「そうはいくかよ……っ！」

司はその魔法陣を瞬時に解析し、構成部分に改竄を加える。現在、
特定のベクトルを向いている空間跳躍の着地点を、この世界とは別
の異界へ変更する。おまけにその魔法陣の発動シーケンスを強制

的に最終段階まで引き上げ、発動させた。

「あっ……えっ!？」

司のすぐそばにいた、魔法陣の術者——フノスが困惑の表情を浮かべ、次いで司が施した改竄を知り戦慄の表情を浮かべた。

「悪いっ!」

魔法陣が光輝を放つその直前、司は寝転びながら魔法陣の範囲内からまろび出る。刹那、魔法陣の周囲を光の壁が覆い、その中にいたフノスを異界の地へと跳躍させる。

ここではない異界——それは人間も魔女も存在できない、全く次元の異なる世界だ。勿論、そんなところへ跳躍させられるということは、生身のままで宇宙空間へ放り出されることと同じだ。

恐怖に彩られたフノスが跳躍中断を試みているが、先ほどの改竄の際にロックを掛けてある。もはや止めることはできない。

ほどなくして死へと向かう魔法陣は奈落への口を開け、フノスを飲み込んで空間を歪ませつつ消え失せた。

「愛音!」

フノスが完全に消えたことを確認すると、司はすぐさま愛音へと駆け寄った。カラスの造魔に嬲られている彼女は既に満身創痕の様相であり、傍目から見ても危険な状態だった。

司は燃えさかる蒼炎を放射状に群がる造魔へ放った。黒き羽は炎に吞まれ、その身を焼き焦がし果てていく。瞬く間に愛音を襲っていた造魔はその姿を灰に変えていた。

「愛音、大丈夫か!？」

「つ、司……?」

満身創痕の愛音に、司は駆け寄る。もはや身を起こすことも辛いのか、彼女はかろうじて首だけを動かし、司を見やる。

「なんで君は、そうやって無茶ばかりするんだ!？」 自分一人だけで苦しまないでくれて、僕は言ったじゃないか!？」

「そ、その……ごめんなさい」

「……………でも、何とかなって良かった」

司は安堵の溜息をつく。

「司。私より他の二人のどこに行ってあげて」

「二人？ エイルさんとシグムドか？」

司は改めて周囲を見渡す。エイルはデリング、シグムドはウルと交戦中だ。状況は端から見ているこちらからでも拮抗しているように見える。

「お願い、司」

その哀願に、司は内心驚いていた。魔女会議の二人を毛嫌いしていた彼女が、この状況とはいえ彼女らの身を案じたのである。

「分かった」

勿論、司は愛音の心情を汲み取り、二人のもとへ向かった。

第8章（後書き）

まだ戦闘の途中ですが、それなりに長くなったので数章に分割することにしました。テンポが悪くなると思いますが、一章だけ丸々長いのも体裁が良くないと思ったので……。

一章分の長さも適度かどうか、読者さんの意見が聞きたいところです。

※次回の更新は6月24日の予定です。

第9章

「おいおいどうした。もう疲れたのか？」

「……………」

エイルはデリングの嘲るような笑みに無表情で応えた。無論、疲労を顔に出さないためである。

先の屋上での戦闘に使用した魔宝具『トリアイナ』で、相当の疲労を抱えたエイルは戦闘の主導権を完全にデリングに奪われていた。今はただ障壁で魔弾を防ぐしかできないことがない。それも、わずかに気を抜けば意識が飛びそうなほどの瀬戸際である。

ふと、デリングの姿がエイルの視界から消えた。何をしたのか、朦朧とした意識の中で見過ごしたらしい。

「ど、どこに……………」

「ここだよ」

背後より響く声。エイルはすぐさま振り向こうとするも、それより先に首筋へ鈍痛が走った。

「あう……………」

一瞬の眩暈ののち、溜まらず膝をつく。いつの間に背後へ回りこんでいたデリングが、延髄を攻撃してきたのだろう。

平素であれば大したことはなかっただろうが、疲労が濃く滲んでいた今のエイルにはまさに致命傷だった。懸命に体勢を整えようとすると、身体がぎくしゃくとうまく動かない有様だ。

「魔術師なんてのもこんなもんか。まあ、同胞を殺し続けた報いだな」

「…………秩序を乱し、己が尽の力を感情のみで振るう行為を咎めることに、何の報いがあるというのですか？」

「秩序だあ？　んなもん、所詮は人間が勝手に作ったもんだろ。私らは人間とは違う、新たな種なんだよ」

「本気で…………言ってるのですか？」

「冗談なんて言うかよ」

戯言は終わりだとばかりに、背後から収束する魔力の波動が伝わってくる。デリングが自分へ止めの一撃を見舞うつもりだろう。エイルの首筋を冷たい汗が伝う。

「人間の味方をする奴は、私の敵だ！ 死ね！」

その叫びとともに、エイルの意識は飛び去った――。

＋　＋　＋　＋

「ぐあっ!？」

エイルの元へ駆けつけた司の放った炎弾は、過つことなくデリングへ命中した。

その反動で彼女の制御していた巨大な魔弾が暴走し、術者であったデリングへと襲い掛かる。

「ち、くうううあああっ!!　こ、このに、人間風情がああああっ!」

暴走した魔力が彼女の皮膚を、髪を、衣服を焦がしていく。それでもデリングは、憎悪の瞳で司を睨みつけた。

数日前に倉庫街で見た光景とそれらがダブリ、堪らず司は目を逸らす。しわがれた断末魔が耳に届いた。

恐怖に身が竦むのを堪え、倒れてしまったエイルへ司は駆け寄る。

「エイルさん、大丈夫か!？」

気を失っているため返事はなかったが、表情は疲労の色が濃く出ている。早く手当てをしなければならないだろう。そのためにも、この戦闘を収拾しなければならない。

司はウルと交戦しているシグムドの元へ急いだ。

「シグムド!」

「リンドウ!？」　動けたんだったらさっきと加勢しろって!」

焦燥を顔に滲ませつつ、嬉しそうに軽口を叩くシグムド。どうやらまだ余裕があるようだった。

「悪い。でもこれで二対一だ。ウル・バルティヴァン、どうやらアスタに分が悪いようだな」

「あら、そうでしょうか？」

仲間の二人を失ってなおも、ウルは平然としていた。強がっているようには見えない。相当の自信があるようだ。

「現に、この時点で私の勝利は確定しています」

「ほう、そりやどういう意——」

「シグムドっ！」

司は首筋を刃物で撫でられたような感覚を覚え、その場から飛び退いた。「おっ？」と呆けた声を上げたシグムドは次の瞬間、かろうじて目視できた極細の糸で身体を戒められる。

「な、んだこりやつ！？ う、動かけねえ……」

「シグムド、待ってろ今す……ちいっ！」

糸はシグムドを戒めるものだけではなかったらしい。司をも捕らえようと、幾重もの糸が四方から襲い掛かってくる。今の司はその糸から逃れることで、手一杯になってしまっていた。

十 十 十 十

「なんなんだよ、こりやつ！？」

「魔宝具『アルケニーの糸』。伸縮自在で無尽蔵に放出できる糸ですわ。このようにモノを縛り上げることも、断ち切りこともできますよ」

シグムドの問いに答えたウルは、デモンストレーションのつもりなのか、糸——魔宝具『アルケニーの糸』で彼の前髪を数本、無造作に断ち切った。はらはらと宙に舞う髪を、シグムドは名残惜しそ

うに見つめる。

「てめー、毎晩入念に手入れしてる髪をどーしてくれんだよ。弁償しやがれ」

「すみません。では、これで勘弁してください」

刹那、シグムドを戒めている『アルケニーの糸』から雷撃が迸る。予期しなかった攻撃に、シグムドは苦悶の声を上げる。

魔宝具『アルケニーの糸』は、ただの糸ではない。魔力をこごめた練り上げられた刃物であり、魔力を伝達するケーブルでもある。目標を絡めとり、魔力を攻撃力として送電することでダメージを与える。それは蜘蛛の糸で餌を捕食する蟲の様に似ている。

「うあああつ!? てめ、やってくれんじゃねーか!」

「頭皮の刺激には強すぎましたか?」

「面白え冗談言ってくれやがる!」

お返しとばかりに『グレイプニル』をウルへ振るってやるが、手首も縛られているため実に弱々しい動きしかできなかった。当然、軽くあしらわれダメージを与えるには至らなかった。

「実に残念なのですが、これ以上貴方の相手をしている暇はないのです。さっさと竜胆司を確保しなければならぬので」

「俺の方がいい男だと思っけどよ?」

「自信満々なところが鼻につくので、ご遠慮致します」

シグムドの軽口を淡々と返し、彼女は再び雷撃を放つ。そのショックでシグムドは昏倒した。ウルが司へ向き直ると、彼は襲い掛かる『アルケニーの糸』を炎で焼き払いながら倉庫内を逃げ惑っている。

だが、それももうここまでである。ウルは王手を決める棋士のごとく、更に『アルケニーの糸』を司へ集中させた。

もはや完全包囲と呼ぶに相応しいほど、四方から司を戒めんと糸が迫っていく。彼の表情が焦りに歪む。

「色々と犠牲を払いましたが、これでようやくあの方のご機嫌を取れます……」

既にウルは司の確保を確信していた。

異界へ強制的に飛ばされたフノスと、暴走した魔力に焼かれたデリング。かつて仲間だったものたちのことをほんのわずかに想い、その数秒後には記憶の中から消し去る。

役立たずだったと罵るつもりはない。彼女らは彼女らのできる範囲で助力してくれた。それで良い、それだけで良いとウルは思っていた。彼女の中には、斃れた二人に対する愛着というものは欠片もなかったのだ。

それよりも、彼女は自身の知的好奇心を持たせる存在と居場所こそが全てだった。あの方へ恩を売るのも、それゆえだ。そしてその土産が竜胆司となる。これは充分すぎるほどのモノだろう。

「さて、仕上げです」

十
十
十
十

「くそっ、これまでかよっ！」

ウルが放った糸——魔宝具『アルケニーの糸』は、さながら獲物を追い這い回る蛇にも似ていた。

追いつがる糸を蒼炎で焼き払い、倉庫内を駆け回りその魔手から逃れようとするが、なかなかこいつらはしつこい。自分を手土産にしようというウルの執念だろうか。

司にはここで屈するつもりなどなかった。だが、疲労が徐々に身体と精神を蝕みつつある。慣れない戦闘が原因だろうことは、容易に想像がつく。ツカサの力も弱まりつつあった。

「ぐうっ……！ 離せ！」

『アルケニーの糸』が、一瞬の隙をついて司の身体を拘束する。身体中を繭のように雁字搦めにされ、一切の動きを封じられてしまった。

「さてさて、これで鬼ごっこはオシマイですね。観念していただきますしょうか」

「でも僕を捕らえても、既に逃げられないだろ。あの魔法陣を維持してた魔女もいないんだぞ」

「他にいくらでも方法があります。面倒事が増えてしまいましたが、それでも目標が達成できればそれで良いのです」

全く動じることの無いウルの口調から、それが虚勢でないことは確かだろう。ならば、この状況を打開するには自分で動くしかない。エイルとシグムドは既に意識がなく、愛音も重症だ。援護は望めない。頼れるのはツカサの力だけだ。

（頼むツカサ……っ！）

司は弱まりつつあるツカサの力をかき集める。だがそれはほとんど燃えカス程度のものでしかなく、もはやウルに一矢報いることすら適わない。

こんなところで終わりか——と絶望にうなだれそうになった刹那、不意に身体に重力が戻った。いや、『アルケニーの糸』の呪縛から解放されたのだ。

「司、大丈夫!？」

声がする方向へ視界を巡らせると、先ほどまで倒れ伏せていた愛音が立っていた。傷や疲労の色はそのまま残っているが、ウルへ向けているだろう瞳は強い敵意の光を宿している。

「アンタの好きにはさせないから!」

愛音がウルへ魔弾を掃射する。しかしウルは全く堪えた素振りを見せず、その場で棒立ちしたまま障壁で魔弾をいなす。その様子に愛音は苛立ったのか、直接攻撃を仕掛けようとウルへ駆け寄ろうと足を一歩踏み出した。

だが、その歩みが止まった。

「な、なに……。なんで動けないのよ!」

喚く愛音を眺める司は、彼女の周囲に『アルケニーの糸』が張り巡らされていることに気づいた。ウルが魔弾をかわさずそのまま棒

立ちになっていたのは、糸を張り巡らすことを悟られないためだったのだ。

「うう、ああああっ!!」

彼女を戒めている糸が一際強く絞られた。愛音は宙吊りにされ、拷問のように四肢を引き伸ばされている。

「くう……。止める、それ以上は!」

一瞬、司の抗議にウルは振り返るが、冷やかな笑みを浮かべるのみで再び愛音への責め苦を再開した。

そして、それが起こった。

愛音の腕から、鮮血が迸った。きつく縛り上げた『アルケニーの糸』が、彼女の体内の血管を圧迫したのだ。

「——っ!」

司は信じられないとばかりに瞠目する。それは愛音も同様だったように、最高潮に達した痛みが彼女を強制的に瞠目させていた。

更にそれだけに留まらず、ウルは駄目押しとばかりに雷撃を放つ。糸で絡め取られていた四肢が焼かれ、その苦痛に愛音は身悶える。その反動で彼女は糸の戒めから解放された。

だが、宙で放り出された彼女は重力に引かれた冷たい床へと叩きつけられる。そして、その動きが止まった。

「やっと静かになりましたね。人の邪魔をするなんて、無粋な女です」

明らかに侮蔑を含んだその台詞も、司の耳には届かなかった。

(……愛音、どうした? なぜ動けない?)

声を出そうとしたが、口が嫌に乾いて言葉にならない。脳内でそう呟く。

彼の視線は動かなくなった愛音に釘付けになっている。司は想像したくもなかったが、冷静な彼の思考の一部が、冷酷な判断を下した。

——愛音は、死

「嘘だっ! 嘘だあああああっ!」

彼は絶叫する。嗚咽が口内から零れ、涙を滂沱させ、受け入れられない現実を締め出すように瞳を閉ざす。

【燃やセ、蹴レ、壊セ、蹂躪セヨ】

絶望が黒い染みのように心へ広がる最中、それは聞こえた。それはツカサの声だ。

だが、それはツカサであってツカサではなかった。その声には慈愛の暖かさや労わりはなく、氷のような冷酷さと機械のような無機質があった。

【貴様ノ負ノ感情ヲ解キ放テ。憎シミヲ殺意へ変エロ】

その言葉が、司の中へ広がる黒い染みをより濃く、より深いものへとしていく。もはや彼の感情は憎悪と殺意のみで占められていた。額をゴテか何かで焼かれるような痛みとともに、身体中に満ちていく魔力も感じる。既に枯渇しかけていたと思ったが、自分を唆すツカサ声の何者かが新たに力を貸してくれているらしい。

何者だろうか、などという疑問はこの際どうでもいい。今は愛音への仇と復讐が果たせればそれで良い。

「さてお待たせしました、竜胆司。そろそろご同行を……」
言い終わる前に、ウル表情が驚愕に染まった。

十　十　十　十

「な、何の真似です……？」

司の身体がまるで火達磨のように、蒼炎に包まれていたのだ。ウルはその意図を図れず、呆然とする。

すると、束縛されていたはずの司が動き出し、こちらへ炎弾を放ってきた。慌ててそれを回避する。

「まさか、『アルケニーの糸』を焼き切るためにあんなことを……!?」

司の身体中を雁字搦めにしていた糸は、そう易々と解けない。それでも、魔力を込めた刃や魔弾ならば断ち切ることもできる。無論、魔力で作られた炎でもだ。

司はその糸を、自身が火達磨になって焼き切ることでの束縛から脱したのだ。ならば、身体中は火傷になっているはずなのだが、今一瞬見た限りでは外傷は全くなかった。恐らく、火達磨になる寸前に自身の身体を防護膜で覆ったのだろう。

「全く、無駄な足掻きを……」

わずかな焦燥を押し隠し、ウルは再び司を捕らえようと『アルケニーの糸』を操る。司の死角や四方から糸が迫るが、先ほどとは違い彼は逃げに徹しなかった。

彼の周囲を膨大な蒼炎が取り巻く。先程の比ではない。それは迫り来る糸を瞬時に焼き払い、自分へも極大の炎弾を放ってくる。

「もう小細工は通用しないということですか……。だったら直接叩きのめして差し上げます」

ウルは『アルケニーの糸』を回収すると、幾重もの雷撃を司へ放った。糸による搦め手から雷撃の直接攻撃に変わっても、司はいささかも動揺せずに障壁で雷撃をいなす。

そんな彼の表情は、冷たく無表情でありながら、その裏に鬼気迫るものを感じさせる。ウルはわずかにだが、自分が気圧されていることを実感した。

「なっ!? あ、あれは……っ!?」

ウルは司の額に浮かび上がっていた呪印に目を留め、激しく狼狽した。それはデリングが崇拜し、ウル自身も一目置く”あの方”が刻んでいた呪印と同一のものだったのだ。

二つの蛇竜が絡み合う、禍々しい呪印。あのようなものはこの世

界に二つとないはずだ。

ならば、彼がそれを持つ意味。それは――。

「まさか……。あの少年が、本当に”あの方”の片割れだっ!?」
ウルは驚愕は、自身の注意力がゼロになるほどのものだったらしい。気づけば彼女は蒼炎の鎖に縛り上げられており、焼け付くような痛みと熱気が身体中を蝕んでいた。

もはやウルに抗う術はない。そんな彼女へ司は歩み寄る。恐怖心を押さえることができなかったウルは、震える声で訊ねる。

「あ、貴方は一体何者なんですっ!? 本当にただの人間なのかっ!?」

「そんなこと、今はどうでもいい」

氷のように冷たい口調でそう切り捨てると、彼は無造作にウルの頭部を鷲づかみする。

「う、ぐうう……」

「燃えろ」

司の瞳に、強い殺意の炎が灯る。刹那、激しい爆炎とともに鷲づかみにされていたウルの頭部が消し飛んだ。

第9章（後書き）

これにて戦闘終了です。あとは物語の締めと後日談に入ります。
ところで読者の皆さんにお聞きしたいんですが、敵キャラがバタ
バタと斃れていく展開はシビアすぎますかね？ 特に最後のウルな
んてビジュアル的には相当ヘビーだと私自身も思うのですが、その
辺のご意見もいただけたらと思います。

……そしてまた更新日過ぎたし。すみません。

※次回の更新は6月27日の予定です。

第10章

頭を失い、崩れ落ちたウルの骸を一瞥せず、司は愛音の元へ歩み寄った。

その足取りは、彼女の安否を一刻も知りたく急いでいるようにも、彼女の無残な姿を見たくないと迷っているようにも見える。

そんな彼の心配は杞憂で済んだ。愛音の息は、弱々しいものの確かにあった。

「よ、良かった……」

傷の具合から危険な状態であることには変わらないだろうが、それでも彼は堪らず安堵の溜息をついた。

ふと、その背後に人の気配を感じた。彼は振り返り、驚愕した。

「ふふっ……。死んだかと思ったか？ 残念だな、私は結構しぶといんだよ」

デリングだった。頭髮や衣服は焦げ、服の破れ目から覗く皮膚は例外なく爛れている。こうして立っているのも奇跡と呼んだ方が良いくらいの状態で、しかしデリングは敵意に瞳を輝かせていた。

それは奇しくも、今し方ウルを屠った司と同じ顔だった。

「殺してやる……。殺してやるぞ。ああ殺してやる。そうじゃねえともう気が済まねえ。もう計画なんざどうでもいい。死ぬ人間っ！」

うわ言を狂った口調で呟き、彼女の激昂に呼応するかのように掌に魔力が収束する。ごく小さな魔弾だが、それでもこの至近距離から喰らえば、当たり所次第では死ぬかもしれない。

もはや満足に身体の動かない司は、愛音を庇うように彼女へ覆いかぶさった。反撃などできる状態ではない。先ほどの激しい負の感情が引いた際、魔力も消え失せている。

司は自身を貫く痛みに備え、目を閉じた――。

だが、待てども何も起きない。司は身体を起こし、再び背後を振

り返り、また驚愕した。

「かつ……はっ」

デリングの腹部から、鋭利な刃が生えていた。彼女の口からは吐血が始まっており、身体中を末期の痙攣が襲っている。

デリングは断末魔すら上げられず、地面に倒れ伏せた。そして現れたのは、背後からデリングを刺したと思われる人物だった。

「……誰だ？」

「レグナム」

警戒心を顕にする司の問いに、男は平坦な声で答える。レグナムと名乗った男は、まるで英国紳士のようなスーツ姿ながら、考えの読めない無表情で咥え煙草という出で立ちだった。

そしてその傍らには、三角帽子に黒衣を纏った魔女の姿もあった。「間に合って良かったよ。あと一歩遅かったら、君もお陀仏だったかもしれないね」

魔女が呑気な口調で言い、こちらへ歩み寄ってきた。司は愛音を庇うように身じろぎ、厳しい視線を向ける。

「そう警戒しないでよ。ボクも魔女会議の魔術師だってば」

「……エイルさんの仲間か？」

「そうそう。で、そのエイルちゃんはどこだ？ ……ありや、やられちゃってみたいだね」

魔女会議の魔術師は、エイルを見つけるなり表情を曇らせた。彼女の身を案じてるのは一目瞭然だ。

「あっ、自己紹介が遅れたね。ボクはブラギ・フィッシュテイル。治癒とか傷の再生とかが得意なんだよ」

それを証明するかのように、ブラギは司の二の腕にあった傷口に手を添え、早口に何事かを詠唱する。すると淡い燐光がわずかに灯り、傷口を見る間に塞いでいった。

「すごい……」

「まあね。それよりも、話したいことがあるんだ」

「話したいこと……？」

「そう。エイルちゃんと彼女の従者君も交えて」

十　十　十　十

「いやあ。しかし君たちがやられてるなんて思ってもみなかったよ」
竜胆家のリビングにて緑茶をすすりながら、ブラギはまるで世間話でもするような軽い口調でそう言っただけだ。

「……………」

「悪かったな」

それに対し、エイルはわずかだが無然そうに口を閉ざし、シグムドは投げやり気味に返す。

魔女会議とあろうものが、本来外部の人間であるはずの司に助けられたとあっては、面目もあつたものではない。それを揶揄するブラギも意地が悪いが、彼女はそれを非難するつもりはないようだ。

「それより、何の用でここまで来たんだ？　まさか観光じゃねえだろうよ」

「勿論さ。というより、連絡はいつてなかったかい？」

そう問われ、シグムドは慌ててPDAをチェックする。本部からの新着メールが入っていた。時間を見ると、丁度ホテルの屋上にて襲撃を受けた最中だった。

「タイミングの悪い時に来たもんだな……」

そう愚痴りつつ、メールの件名を確認する。そこには『任務変更指令』と書かれていた。しかも最重要案件のみに施される暗号化までされていた。

どうということだ、とシグムドがブラギへ目で問うが、彼女はともかくメールを見ると言わんばかりに無言を貫く。

横からエイルが覗き込んでくる中、復号化したメールを開き本文を確認した彼は、厳かに顔を上げた。

「……そういうことか」

「事態はもう待った無しのとこまで来てるんだ。ホントはああなる前にボクたちが到着するべきだったんだろうけど……」

ああなる——ウルたちによる司の拉致の件を指しているのは言うまでもない。

「遅れてしまったようだね。悪かったよ」

「別にブラギが悪いわけではありません。……本来は私たちの仕事でした。あの異端者の挑発に乗っていなければ……」

滅多にないことに、エイルは歯痒さに唇を噛み締めていた。それをあやすように、シグムドが彼女の頭を撫でてやる。

「じゃあねーよ。もう起きちまったことは。要は、これから……だろう？」

ブラギとレグナムを見ながらシグムドが問う。レグナムは煙草を吸いながら無言で首肯し、

「その通りだよ。もうあんなことを起こしちゃいけない。そのためにボクらは全力を尽くすんだ」

ブラギも改まった表情でそう語る。

魔女会議が新たにエイルたちへ与えた任務——それは今まで監視対象になっていた竜胆司の『護衛』であった。

ブラギ・フィッシュテイルとその従者・レグナムはその任務に対する追加要員である。そのことから、魔女会議の竜胆司へ対する関心の高さが窺える。

「で、その当の本人はどこに？」

「ああ、コレのとこだよ」

ブラギの問いに、シグムドは笑みを浮かべながら小指を立てて見せた。

十
十
十
十

瞳を閉じ、安らかな寝息を立てている愛音の寝顔を見ながら、司は安堵の溜息をついた。

ブラギの治癒能力による応急手当の後、彼女をひとまず竜胆家の空部屋に運び込んだ。応急手当と言ったのはブラギ本人であったが、傷はほぼ完全に癒えている。寝顔も苦痛を堪えている様子がないので、心配することはないだろう。

そうして彼女への心配事がなくなると、次に彼の頭をもたげたのは、あの戦闘中に聞こえたツカサの声である。

（あれは、何だったんだろう……）

いや。ツカサの声というより、ツカサの声と同じ別人と言うべきだろうか。

ともかくその声は、愛音を傷つけられ激昂していた自分の負の感情に囁きかけ、唆し、増幅させた。その結果、司はある種の覚醒とも言えるべき状態へ変貌を遂げ、あの戦闘に勝つことができた。だが、そのツカサと同じ声の存在が彼にはどうしても気に掛っていた。

（僕が知らない、ツカサの一面があるというのだろうか？）

その可能性は否定できない。そもそも彼女と意思疎通ができるようになったのは、ここ数週間前からである。

しかも、それすら完全なるものではなく、断片的な会話の応酬でしかない。それに、彼女が自分の生まれるべきだったきょうだいの片割れであるというのも、司の勝手な想像でしかない。

もしかして、全く別の何者なのかもしれない……。そう考え、司は身体中の肌が粟立つのを覚えた。自分の中に異質なものが潜んでいる。その可能性に思い至ったからだ。

「……んっ。あ、司……？」

物思いに耽っていた司は、その声で我に返った。畳みに直接敷かれた布団に横たわっていた愛音が、心配そうに自分を覗き込んでいる。

「目が覚めたのか。良かった」

「何があつたの？ 私、確かあの魔女に……」

「あれはもう終わったよ。今は僕の家にいる。僕も愛音も、そしてエイルさんやシグムドも無事だ。何も心配しなくていい」

「……そう。良かった」

愛音も安堵の溜息をついた。やはり変わったな——と司は考える。あれほどまでに嫌っていたあの二人を案じるようになった。これは良いことなのだろう。

「愛音に話さなきゃいけないことがあるんだ。起きれるんならリビングに来てくれないか？」

「……大事なことなのね？」

「ああ」

そう答える司の心中は、穏やかではなかった。

目に見えない大きなうねりは、もはや自分たちを逃さない大波となつて押し寄せていた。気のせいだ、などとこの期に及んで悠長に思うわけにはいかない。

皆を巻き込んだ張本人として、この事態に立ち向かう必要がある。司は心に強く誓った。

——戦うことを。

第10章（後書き）

次回、最終話です。

※次回の更新は6月30日の予定です。

エピローグ

無人の倉庫では、先程の戦闘の痕跡がそのまま残されていた。

胸を貫かれたものと、頭部を無くしたもの。二人の骸が横たわっている。倉庫自体も戦闘であちこち破損しており、もしこれらを目撃されれば要らぬ問題が発生することだろう。

そうした問題を事前に防止・整理・抹消するのは魔女会議のエージェントの役割である。既にエイルやブラギにより、この戦闘の情報本部へ伝えられている。そう経たないうちに、エージェントが事態のもみ消しにかかるだろう。

だが、骸の処置だけに関しては、エージェントたちの出る幕はなくなつた。

倉庫内へ、おびただしい数のカラスが侵入してきたのだ。それらは二つの骸へ殺到し、死肉を租借し始める。まるでサバンナのハゲタカのような行為だ。

瞬く間に骸の肉は削がれ、血がこびりついた白骨が頭になり始めた。その様子を、額に呪印の刻まれたカラスが天井裏から黙視していた。

他のカラスが処理に奮闘している中、呪印のカラスだけ高見の見物をしているのだが、そのカラス自身も他のカラスも全く意に介していない様子だ。

くくくつ、とそのカラスのクチバシから人の声が漏れた。

『良いものを見させたもらったぞ、ウル。貴様の死は無駄ではなかったようだ』

カラス——いや、そのカラスの視界を用いて倉庫内の一部始終を傍観していた魔女は、そう呟く。

先程の魔女会議の魔術師と従者たちとの戦闘で彼女が見たもの。それは彼女が長年探し続けていたものに相違なかった。

ウルは報告に物珍しさを覚え、造魔を介して戦闘を観戦していた

のだが、まさかそれに出会えるなど、まさに僥倖としか言えないものだった。

『竜胆司、と言ったか。今まであんな人間の肉体に隠れていたとはな……』

だが、ついに見つけた。自らの片割れ、半身を。

あの蒼炎と今カラスにも刻まれている、二つの蛇竜が絡み合った呪印が、その何よりの証拠だった。

『待っているがいい。我が直々に迎えにいつてやるその日まで。私はお前を逃がさない。完全なる力を取り戻すために……』

魔女——ジャンヌ・ダルクはそう独りごつ。その台詞は死肉を食い漁る音に掻き消され、誰の耳にも届くことはなかった。

エピローグ（後書き）

これにて、「サバトの魔術師#2」は終了です。

ラストを見て貰って何となく感付いている方もいるかもしれませんが、今回は来期シリーズを完全に意識した終わり方にしてみました。肝心の続きなのですが、まだぼんやりとした構想しかなかったりするのですが、はてさてどうなることでしょうか……？（聞くなっ）

また、この作品は私的にはそれなりの満足感と多々の議題を残しました。今後も色々な作品を書いているつもりですが、更なる精進が必要だなー、と痛感した次第です。

ちなみに次に書く作品ですが、「サバトの魔術師」とは別のモノを書くのかと画策中です。それもまだ決まってませんが……。

それでは長いあとがきでしたが、ご愛読していただきありがとうございます。また別の作品が掲載されましたら、お付き合いして頂ければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0490h/>

サバトの魔術師 #2

2010年10月8日15時55分発行